

報 特 攻 会  
 平成13年2月  
 第46号

〒105-0001 東京都港区  
 虎ノ門3-6-8 第6森ビル  
 財団法人 特攻隊戦没者  
 慰霊平和祈念協会  
 電話 03(3432)1090  
 F A X 03(3432)5567  
 編集人 田中 賢一  
 発行人 木村 元正

### 慰霊とは何か

#### —特攻散華した英靈に 応える途—

戦没特攻隊員の慰霊祭は、我が協会が主催するもののほか特攻に縁のある各グループの行うものがあり、また知覧や鹿屋のように、特攻基地にまつわる組織が主催するものがあり、年間を通じて随分沢山行われている。主催者が老兵だけというものは、やがて消滅するであろうが、そうでないものは延々と続くと思う。またそうならわねばならぬ。

ところで、慰霊祭を主催したり参列したりする人のうち、特攻隊生き残りの者や、特攻隊員と身近に在った者は、相済まないという気持、贖罪にも似た気持が心の片隅にあって、出席している。まことに清純な精神である。また久し振りに昔の戦友に会えるのを楽し

### 目次

慰霊とは何か.....	1	義烈空挺隊の遺品に憶う.....	14
川南護国神社例祭.....	2	大津島に於ける回天追悼式典.....	17
特攻隊員の日記⑥.....	3	未だに終った滑空機特攻.....	18
戦没者遺書遺詠等の伝承.....	6	忘れ難い人たち.....	21
大東亜戦争忠魂顕彰五十九年祭.....	9	大西滝次郎遺書の碑建立.....	23
特攻隊員の手紙②.....	10	高千穂降下部隊を讃える歌.....	24
特攻隊の裏方.....	11	特攻隊員の人を恋うる歌.....	28

みに、直会に期待を持って参列する者もいる。それが悪いという訳ではない。各人様々な気持で集ってくるのだが、老兵の参列はやがて消滅する。

特攻慰霊は何処に主眼をおいて行わべきであるか、特に次の世代にはどのような考で行ってもらはねばならぬか、それをしっかり見据えておかないと、お祭り騒ぎになってしまう。先の代がやったのだから俺達もやろうでは、鎮守様のお祭りである。

然らば慰霊祭の主眼は何かということそれは御祭神の御心に副うことである。一命を棄てて日本の国土、親兄弟同胞を守ろうとするのが御心である。しかし、体当りして敵艦を沈めたからといって、直に戦勝に繋がり、国土国民が守れるとは信じていなかった。そこには後に続く者を信じる気持があったからこそ、あのように死に向って突進できたのである。八幡神忠隊の大石政則海軍少尉は母親宛の遺書にいう「二三

〇発進、沖繩周辺の敵輸送船に対し痛快なる突入を決行します。仮令途中にて墜されることがあっても、戦果はなぐとも、二十代の若武者が次から次へと特攻攻撃を連続し、大和島根を守りぬくことができれば幸ではありませんか”

特攻を初めて戦法として正式に採用した大西滝治郎提督は、比島在任中に次々と特攻機を発進させた。初めは捷一号作戦の初動を制し得ると思った。19年も終り20年になる頃は類勢覆うべくもなく、いくら特攻を繰り返しても戦勢を挽回できるとは思えなかった。そのとき大西提督は言った「神風特攻隊が出て、しかも万一負けたとしても、日本は亡国にはならない。これが出ないで負ければ眞の亡国となる”この提督の最後が立派だったから、この言葉には重みがある。要するに大西の言も、先に引用した大石少尉の言っていることも根底は同じである。国を興すのは

戦後半世紀余、今や日本国民の精神的荒廃は著しいものがある。これを救うものは特攻精神にはかならない。形而下の弾は飛来しない。しかし形而上の弾は注がれている。それは中国や北鮮などからであるが、我が政府の彼等と接渉する様をみると、甚だもって心もとない。それにも増して我が陣営をみると、自壊作用が甚しい。道義の類廃、その根源は教育に在るのだが、日本歴史上かつてみない荒廃振りである。これが特攻隊まで出して戦った民族かと思う。

さてこの辺で標題に戻って考えてみたい。慰霊とは何かという問題である。後に続く我々、それは現在の我々だけでなく、これからの日本人は、慰霊とは戦没特攻隊員の御心に副うことだとは既に述べた。御心とは何か、御国の為我が同胞のため命を棄てて尽くせと

特攻の形而上のものである。戦後半世紀余、今や日本国民の精神的荒廃は著しいものがある。これを救うものは特攻精神にはかならない。形而下の弾は飛来しない。しかし形而上の弾は注がれている。それは中国や北鮮などからであるが、我が政府の彼等と接渉する様をみると、甚だもって心もとない。それにも増して我が陣営をみると、自壊作用が甚しい。道義の類廃、その根源は教育に在るのだが、日本歴史上かつてみない荒廃振りである。これが特攻隊まで出して戦った民族かと思う。

いうことである。現在戦争をしている訳ではないから生命に別條はないが、その心掛けを確かと抱いておれば、新聞の第一面も、第三面も美しい記事で埋まるであらう。社会が浄化されるであらう。そうなることが、最大の慰霊である。慰霊祭で玉串を捧げたり焼香したりしても御霊はお喜びにならない。

義烈空挺隊の棟方哲三少尉は、軍隊に入る前に小学校の訓導をしていた。健軍飛行場を出撃する前に新聞記者を呼びとめて言った。「私の今生の願は、もし叶うことなら私の今の気持を私の教え子、いや全国の学童に伝えて征きたいと思うのですが、それは叶わぬことなので、ここに書き留めておきました」と言って手渡した紙片には、

全国ノ学童ニ寄ス

義烈空挺隊 棟方少尉

俺が行クノ

俺ガヤルノ

俺ニ統ケノ

コノ意気ヲ進メ

コノ意気ヲ勝テ

棟方少尉の御霊は今の日本人に向けて何と言われるであらうか。そして我々は如何に応えたらよいのか。それは自づから明らかである。

宮崎県川南町が主催して毎年11月23日に行われる川南護国神社の例祭、そこには陸軍空挺部隊の全戦死者が合祀されている

田中 賢一

この記事は毎年掲載させてもらっているもので、今回は我々老兵の気持を表すものとして、私が町長に続いて奏上した一文を紹介させてもらおう。

川南護国神社に齋き記る

空挺部隊の御祭神に捧ぐ

今年も亦我が心の故郷川南を訪れ来りぬ かつてこの地に於て相携え練武に勤しみし思い出も 半世紀を越す遠き昔のこととなりぬ 臉にうかぶ往時の事 共に匂うが如き若武者なりき 御祭神はその姿のまま在らずに 我ら老いさらばえ 杖にすがりて社前にまかりこしぬ 思えば邯鄲一炊の夢の如し 後に続くを信じて逝きし御霊に報ゆるに 今の世の何と御心に背くこと甚しきか 己あって祖国あるを忘れ 権利あって義務あるを知らざる者甚に溢れ 一命をなげうちて国に殉ぜし人の子孫かと 慨嘆に甚えざるものあり 我ら往時御祭神と共に抱きし志失うことなきも 微力にして世の弊風を匡す能は

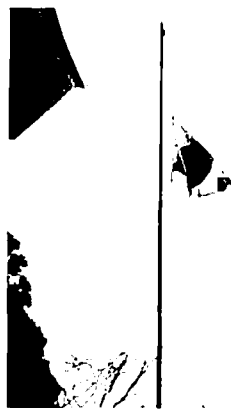
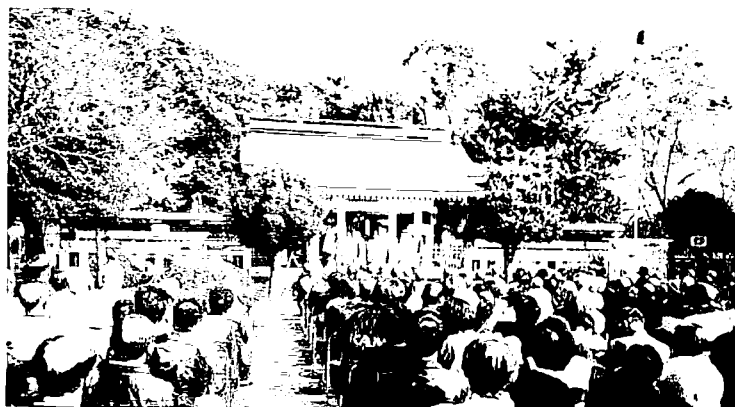
ず 黄泉に見えて叱責免ることなからん 余命少なきもなお努むることあらむとす 終わりに臨み地元御出身の六百余柱の御祭神に申し上げ 山紫水明のこの郷に生をうけ 国家非常のときにあたり 祖国の守りに散華せらる 永く郷土の儀表たるべし 純正日本人たる郷土の人の守護のもと 御心泰く神鎮まり 給え

ここに空挺部隊の戦友を代表して老老の布衣諸霊の安泰を希い一言鎮魂の辞を捧ぐ

戦友代表 田中 賢一

邯鄲一炊の夢 中国のある物語からでた言葉で、粟飯が炊き上がる間に栄枯盛衰の一代記を夢みたという話だがここでは往時から今までの永い年月が夢のようだという意味に使った。黄泉 冥土、あの世。老老 おいばれ。布衣 庶民、無位無官の人。

女子中学生による神楽奉納



特攻隊員の日記⑥

〔陸軍最後の特攻基地〕より

大塚 要少尉

特操2期 22歳

第433振武 20年5月25日

(2式高練) 万世発進沖繩へ

第一六六一五部隊ニテ訓練中ハ遂ニコノ日記ヲ書カズシテ終リヌ。コノ間反省シ修養ノ糧トシテノ日誌ヲツケント志シコト、再三アレド志スノミニシテ終リタルハソノ生活ノ然ラシム所ナルベシ。今此所ニ思ヒタチタルマ、ペンヲト

昭和二十年一月二十五日  
特別攻撃隊ニ志願スルヤ否ヤ、論ヲ待タズ、我が身アルハ固アルガ故ナリ、固ナクシテ家ナシ、生アラバ死アリ、特別攻撃隊ニ参加シテ玉碎スルハ、我ニトリ最上ノ死場所ナラム、敵ハ我等ノ間近ニアリ、彼ヲ撃滅セスシテハ我ガ理想タル、大東亜ノ新秩序ハナラズ、

八紘為宇ノ大精神ハ大東亜ニ遍カズ。

三月十五日

東京ニ対スル敵ノ爆撃ハ相当ナルモノト聞ク。只帝都民ノ頑張りヲ望ムノミ。学徒兵ハ未ダ戦線ニハアラジ、暫シ。

三月二十八日

只今十二時十分ナリ、書クコトモナシニ、ペンヲ取ル。俺ハ何ヲセントスルカ、落着イテ本ヲ読ム氣ニモナラヌ此頃ナリ。茫然トシテ日々ヲ送ル。

水ハ冷イ、当リ前ダ、世ノ中ニタクサンクダラヌコトヲ書物ニシテ、得意ニナツテキル奴ガ居ル。

俺達ハ当リ前ノコトヲ、当リ前ニ実行スレバ宜シイ、国家ガ要求スル所ニ飛込メバ宜イノダ。シカシ、考へ、云ヒ、書クノハ易イガ、実行ハ難シイ、其所ニ修養ガ必要トナル。

特攻隊ト簡單ニ謂ヒ、一機命中ト云フガ、ソノ中ニハ一人ノ人間ノ神ノ如キ精神ト肉体ガアル。

俺モ特攻ニ当リ前トシテ征ケルカ、凡テヲ超越シテ、最モ、超越スベキ何物モナイ。

俺ノ感情ハ多分ニ類癡的デハナイカ、皇軍ノ將校カ、將校ハ軍隊ノ根幹ナリ、日記ハ人ニ

見セル為ニ書クモノデナシ。

自己ヲ偽ルナラ書カヌ方ガマシナリ。

昔イテ自己ノ向上ヲ計ル、文句ヲ云フナ。

之ハ俺ノ日記ダ、書ケ、思フ存分。

偉イ人ノ真似ヲスル必要ハナイ、偉サウナコトバカリハ書カヌ。

俺ハ何モ偉クナンカナイノダ。

俺ハ皇國ノ一男子ナノダ、只ソレダ

ケダ、義務、権利、ソシテモノハ問題デナシ、俺ハ皇國ノ男子トシテ当リ前

ノコトヲ為シテユケバヨイ。

昔カラ定マツテキルモノヲ、ヤレバ

イイノダ。

航空隊ニ志願シタノモソレダ、國家ハ空中勤務者ヲ必要トスル故、男子タル俺ハ当然志願シタ、敵ヲ撃滅スルノ

ガ俺ノ任務ダ。

國家ガ特攻ヲ必要トスル、俺ハ志願シタ、命令ハ何時來ルカ分ラヌガ、此

様ナ氣持ハ成行ニ任セル氣ダケカモシ

レヌ。深く考ヘルト分ラナクナル、成

行ニ任セテ単怯ナ態度カ、俺ハ信ズル、ソシテ信ズル俣ニ進ムノダ。

悟リヲ開クナンテ大ソレタ氣持ハナイ、悟リナンテ分ル苦ハナイノダ。

敵ハ沖繩ニ上陸ヲ開始セリト、大言

壯語スル百人ノ操縦士ヨリ、黙々ト実行スル一人ノ操縦者ヲ現在ノ國家ハ要

図ニ乗ルヤンキー、何処マデ來ルカ、

機動部隊ノ半数ヲ費サントスルカ。

我ハ信ズ、日本男子ハ、淺薄ナルヤンキー青年ニ負ケズ、征カン、突キ進

マン。

現在ニ嘆ク勿レ、現在ノ我ハアマリ

ニモ暇ガアリスギル、此レモモウ暫ク

ダ、命令ガ出ル迄、転属セバ斯ノ如キ

事無カルベシ、今ノ中、勉強スベシ。

四月二日

午後隊長殿ノ壮行会アリ。

「後ニ続ク者アルヲ信ズ」特攻隊長ト

シテ、大内隊長ハ征クナリ、戦友井口、

川村、北村ノ諸兄モ亦。

(注) 隊長大内清中尉(陸士五五六期)、井口清、若林富作、栗津重信各少尉(特操一期)他十三名、四月十三日、第七降魔隊(第一〇七振武隊)出撃散

華す。

四月三日

特攻隊出發ス、十五機。

我等亦、征ク日來ラン。次ハ我々ノ

番ナリ。

ちはや振る 神ノ皇國を 護らなむ  
仇なす敵に 我が身うたせて  
仇艦に 爆薬抱きて 我は飛ぶ  
皇國の幸 折りつつ  
たらちねは 我が日頃を 思ふらむ

君に忠なる 武士なれよと

四月七日

航空被服又配当さる。明日より演習なり、此の陰に空中勤務者を止めし戦友の心中を察す。

(注) 操縦者として選抜され、他は通信航法等にまわる。若尾達夫。二月二十日、われらの非常時と同じ。

我は飛ばん、而して特攻隊員たらむ。昨日、小磯内閣の辞職を聞く。挙国戦に邁進するの秋、国の最大幹部の動揺あるは遺憾なれども、我々の兎角云う所にあらず。世論にまどはず政治にかゝはず。命のまま動くが軍人の本分たるべし。速に敵米を倒すべき手段あるを祈るや切。

四月十一日

軍隊に入りて二回目の誕生日を迎ふ。満二十三歳。

午后又命令を受領す。泉溝なり、小西少尉(注)を長として十五名。我々は第一番の特攻なりと聞く、又快なるかな。

(注) 小西吉彦少尉 特操一期、第四三三振武隊々長生存

誕生日に死ぬことの定まる。偶然ならざるや。

我は励まん、一途に。

生を享けて二十三年、皇国の将校なり、男子の本懐。

四月十八日

一すぢに ただ一すぢに 大君の醜の御権と 散るぞうれしきあさみどりの 清く澄みたり 大八州

よせくる夷の 仇艦沈めて さばへなす 仇うちはらわん 戦友がらよ

心一つに 日本空を救ひて 俺はと号要員だと云う事は、俺が一番よく知ってゐる。今迄考へても見なかつたけれど、しかしゆつくり考へて見よう。今日、文句は要らぬ。

と号要員は特攻隊員である。一機体当りにより一艦を屠らんとする。当然死ぬものである。死は一月に迫つてゐる。不思議な位、定まつて見ると落つたものらしい。別に悩むこともいらぬ。

神勅相違なし。

皇御国は天壤無窮

陛下の股肱たり

喜びを感じる

四月二十日

戦友の中に特攻隊員として、敵に当り砕ける時の話がはびむ、要するに凡人である以上、いよいようち当る時は、夢中なるべしと。

心境の変化なきものは、聖人か馬鹿なるべしと謂ふ。

だから馬鹿は聖人に近きものなりと。如何ならんか、今の俺にわかる苦のものにあらず。

必要なるは旺盛なる精神力なるべし。本人より知ることを得ず。

夷艦砕き沈めて 海原に

君の股肱と ちるぞうれしき ふるさとの鎮守の森で むらひとにのべし決意を 我は忘れじ

五月六日

出発、軍司令官閣下に申告したのち、盃をかはし見送りの前を通る。鉢巻(日の丸)をしたり、ものものし、自己もその一員たるは夢なるか、感激す。

女子通信隊中学、女学校、戦友等の熱狂の見送りの中を、一機一機出発。隊形を整へて奉天に向ふも、奉天着、天候悪きため一日を過すこととなり、愛国旅館に泊る。この宿は先発の神鷲たる先輩の泊まれる宿にして種々書きしものあり。自分も書かざるも不味し、字は上手ならざれば恥かし。

五月八日

昨夜、女子有志の方々より、血染の日の丸鉢巻を頂戴し感激す。名も云はず。

昨日の女子の方々が出発見送りに来られ種々と話す。純情なる女心、御互に一途任務に邁進せむと誓ふ。九時過迄愉快に話し会ふ、本当に真心をもて我等を送る人には感激あるのみ。

俺達、死について考えてゐるものがあるか、死を恐れて何が出来る。特攻隊は自決を命ぜられたものに等しい。



奉天 愛国旅館で撮影した第433振武隊の記念写真一前列左から2人目が大塚少尉

しかし、斯くは考へず、死を中心に考へればかくなるかもしれぬ。俺達に生死は問題外なのだ。特攻隊員も、でない軍人も何等変る所はない。特攻隊員たる故に特別に扱はれるのは心苦しい次第。軍人は誰でも同じではないか。命令、任務。たゞそれだけだ。死は易し死は帰するなり、死は無なり、己なければ何かあらむ。

討つものも討たるものも土塊よ  
斃れてのちは もとの土くれ(古歌)  
土が土に帰る、此れ自然なり。

然して君の御楯と散る光栄によくするは、此れ以上のことあらむか、たゞ死んでも是当然なるに、畏くも、大君の股肱として、無上の名譽の中に死ぬを得る、男子、日本男子たるもの之に過ぐる喜びあらむや。俺は征く。

五月十日

京城の一夜明く、朝より雨なり、出発せず。

ドイツも無条件降服し、戦は日本のみ、我等が責務重大なり、我等沖繩の全艦を葬らむ。

五月十一日

特攻隊員ときまって、一月を過ぎたり、我に進歩ありしや、人間死ぬまで修養すべきものぞ。

日本の本 たゞ日本の 弥栄祈り  
我はくだけん 仇の海原

五月十七日

快晴なり。大邱に飛ぶ。快なり。俺は遂に最も戦場近く来たのだ。これ明日は戦の九州へ飛ぶ。考へるに胸躍る。  
初陣、然して散らむ。

初陣を明日にひかへて 胸をどる  
重き任務に たゞ死なむのみ  
仇艦を 轟沈せむぞ 我が決意  
皇御空の華とちりなむ

五月十八日

午後出発一路九州に向はんとせしも何たるか故障の為、我一人、又大邱に止まる。

五月二十日

飛べり、戦友に追つくを得たり。現在時十一時。  
男度胸一つなれど、無理はすまじきもの、戦友とともに行動できるは何よりの喜びなり。

明日は鹿児島にとばむ 鹿児島より沖繩へ。

アルバムも大邱にて沼部見習士官及青木曹長に家に届ける様依頼す。

アルバムを見て母泣かんか。泣くもよし。然れど強く誇りもて生きらるゝを要は望む。

我が写真見て嘆くより 日本  
母と雄々しく 生きてあれかし

五月二十三日

本日、此所鹿児島島の基地に至る。本日は航法中九死一生を得たり。

即ち山上を航行中、雲中に入り、己の機姿勢わからず、遂に切りもみに入り、墜落するも、幸ひに谷に降下し、機を正して飛行するを得たるは不幸中の幸なり。本日山に激突して死せんか、犬死なり。

全くあの雲中に於ける切もみ、現在考ふるもぞつとするものを禁じ得ず。明日死なん身の一曰なれど、俺は既に死したり。明日敵艦にあたるは俺の魂なり。

明日出撃の予定なりしも一日延期させらる。

永からん生命なれども君のためむだに死せずと 今をよろこぶ

五月二十四日

明日出撃と決定す。本日は機体の整備をす。無線にて我突入すとうつ任務を受く。

ただ征かんのみ。篠崎、永井来る。

海原に 敵をもとめて 我征かむ

明日を思ひて 気静かなり  
破邪の剣 心静かに 抜くときに

我に仇する 敵のほうらる  
初陣を 明日に迎へて 我樂し

仇艦くだきて 華とちらむぞ  
(注) そして翌五月二十五日万世より  
第四三三振武隊として出撃散華す。

母上様

要は特攻破邪隊の一員として征かま

す。  
母上様もこの一事あるは覚悟されてゐたことと思ひます。要は航空に志願する時よりこの如きことあることを思ひ、敢て志願したのでした。

父上亡きあと、母上が如何に御苦労なされたか、一番よく知ってゐる自分です。然し国あつての家です。国のお役に立つ、君の御楯となる。男子としてこれ以上の光栄がありませんでせうか。

母上には申訳ありません。家は御願ひします。要が居なくてもまだ男三人、男三人国に斃れたらせい子に家をつがせて下さい。

家のことは凡て母上に御委せします。母上強く生きて下さい。日本の勝つ日

を思ひます。必勝。  
ただ、やろう、ひとすじに

## 戦没者の遺書・遺言・遺影・遺詠等の伝承について

小崎 武

### 一、前書き

我々は戦後五十余年もの永い間、戦没者の遺書を始め遺言、遺影、遺詠などを、戦友会会報、郷友誌、偕行誌、靖国会報、特攻会報、その他の刊行物で見聞して来たので、戦没者の家族を思う心情や国家に対する愛国心、死に直面しての赤裸々な心境には、唯々慟哭の涙を流したものだ。またその遺族に対しては家族愛の深さに断腸の思いであった。我等が今日あるのは、一に彼らのお陰である事を痛感している。

「終戦の詔勅」に続いて「陸海軍人に対する勅語」が下賜されたが、特に戦没者には次のように仰せられた。「若し夫れ鋒鏑に倒れ疫癘に死したる、幾多忠勇なる将兵に対しては、衷心より之を悼むと共に、汝等軍人の誠忠遺烈は万古国民の精髓たるを信ず。」と。

昭和天皇の戦没者を悼む優渥なる大御心には敬服のほかはない。此处に「君臣一如」のお国振りのお手本が示され、「股肱の臣」としての大義をお論しになられたと、拝察申し上げるものである。即ち戦没者の誠忠偉勲を顕彰し、

国民の儀表として永く後世に伝承せよ、それが生き長らえたお前達の勤めであると仰せられたのである。

我々としても大御心を体して、戦没者の慰霊祭を何回となく実施し、その偉勲の顕彰を一所懸命やって来た。しかし老兵と言えども老齢には勝てない。そこで私は表題の様に、刊行物によってこれを後輩に伝承したいものと思うものである。

### 二、遊就館に戦没者の遺品を見る

遊就館は明治維新から大東亜戦争に至る迄の、御祭神の遺品、戦役の記念品等を陳列して、その奉慰と遺徳を欽仰するにある事は皆さんの既にご承知の通りなので、その内容については説明を省略する。

靖国神社の奉讃会発行の靖国会報には、毎月見学者の感想文が載っているが、戦争を知らない子供らが驚異の目で、素直に感想文を述べており好感が持てる。私は曾って米国のスミソニア航空宇宙博物館を見学して、その規模、展示品の巨大なのに仰天したものだ、それよりも見学者が多くしかも親が子に丁寧に教育している。伝承とか伝統などの生の姿を目の当たり見て、大変羨ましいと痛感した。それに比べる遊就館の見学者は、何時行っても

見学者が少なく寂しい思いだ。

### 三、靖国神社の社頭の「英霊の言葉」

靖国神社の境内に、昭和35年から戦没者の英霊が、生前残した遺書や遺言、遺詠等が墨痕鮮やかに掲示され、参拝者の注目を浴びている。又これらを纏めて「英霊の言乃葉」として発刊している。

郷友連盟では毎月「英霊の心」として、郷友誌に掲載しているが、これは大変良い企画だと思っている。毎月英霊の出陣に際しての遺書、遺詠等を読む機会があれば、雑事に追われる我々でさえも有り難いと思っている。今後にも継続されたい。

### 四、戦友会会報

戦後は雨後の筍の様に、部隊毎に戦友会が統出し慰霊祭も盛んに行われ、会報も発行されたものであるが、五十年たった今日は会員の老齢化に伴い、戦友会が解散し会報も廃止し、慰霊祭も行われなくなったのは止むを得ない事である。

私の在隊して居た近衛歩兵第1連隊会は早く解散し、歩兵第22連隊会は今年終焉を宣言した。自力で存続出来ない部隊会は、永代供養を靖国神社に願っている。それが忠魂碑や連隊碑の様に文化財として残るのは当然とし

ても、連隊会やその会報等のような無形文化財は、解散すれば月日の経つにつれて忘却されてしまう。その後世への伝承は中々難しい問題で、我々が知恵を絞る所である。

### 五、特攻会報

特攻隊の慰霊平和祈念協会(会長瀬島龍三氏)では、年四回の特攻会報を発刊している。内容は特攻隊の慰霊祭を始め、特攻隊員の遺書や遺言、遺影、遺詠など当時の活躍ぶりと共に、毎回28ページにわたって編集されている。

この協会は昨年十二月締切りで、特攻に関する遺書、遺詠、辞世に限定して原稿を募集していた。何しろ瀬島会長は八十六歳の高齢であり、編集長の田中賢一氏も八十を越えて、奮闘努力されているが、唯々ご健闘を祈らずにはおれない。

### 六、戦中戦後秀歌集

著者は、福岡市在住で陸士第五十五期生、平成11年七月自費発刊。全編四百余頁の浩瀚なもので、収録する短歌も千六百首を越える。開巻第一頁には、「開戦の詔勅」「終戦の詔勅」を掲げ、次いで「御製」として明治天皇、昭和天皇、を掲載しているが、著者の恋闕の心情の深さには敬服の外はない。

前書きには、「……中略……歴史を繙き建国の起源や祖先の歩みを偲ぶ事は、民族国家の一員としての本能と言える。幸い我が国には、古事記・日本書紀を始め、神話・歴史書・戦記等があり、それらを通じて時代の真相に迫る事が出来る。……中略……悲しいかな、戦い敗れて五十余年。当時の挙国一致の精神、前線銃後の敢闘精神等は見る影もない程だ。特に戦没者の貴重な和歌など後世まで残る事が出来るか。戦中戦後の秀歌は人の心を打つものが沢山ある。私は和歌を詠むにつけ、このまま埋もれて再び人目につかぬとは余りに口惜しいと思ひ、この十数年記録したものが数千に及んでいる。その中で特に心に残るものを選択して、この度上梓を決定した次第である。」と述べている。そして戦没者の遺詠・辞世など多数記録に残しているが、実に立派である。

### 七、靖国神社編集の「遺稿集」

昭和48年に靖国神社が「遺稿集」を発刊している。内容は遺書・遺詠・日記・書簡等で、日本遺族会や戦友会等が五年の歳月を費して、六百頁に編集した大冊である。戦没者は六百余名で、出身県別・陸海別・戦死地・年齢等を紹介している。

宮司の筑波藤麿氏は序文に次のように述べている。「遺稿の殆どは、父母兄弟に宛てた書簡が多く、しかも戦勢不利なる戦場にあつて、望郷切々たる感慨の中、祖国を愛し肉親への熱き思いを、明日をも知らぬ死に直面しながらの、赤裸々な生の声を直接に後世の若い人達に受け継いで貰いたい。」また「その尊い心を、我が日本の将来に生かす責任のある事を理解して貰いたい。『聞け、わだつみの声』の如き或るイデオロギーで、反権力の勢力に迎合して発刊されたものとは立場が根本的に違う。」と述べている。我々の心情を代表するものでなかるうか。

先年、遊就館で「英霊に捧げられた花嫁人形」の特別展があった。丁度我が母隊の221連隊の慰霊祭と重なったので見学した。それは戦後五十余年経っても、英霊を憶う肉親の真情には実に深いものをまざまざと見せつけられた。飾られた遺影は皆驚くばかりに若々しく凛々しい兵士である。そして女も知らず恋も知らず無垢のまま戦場に征つて又と帰らなかつた。遺影の前に捧げられた美しく着飾った花嫁人形も心なしか悲しく見えたが、子や夫等を憶う親心、夫婦愛を痛いほど感じられて思わず泣かされた。

子の遺影悲しきまでに若かりき

花嫁恋しと親を哭かしむ  
こういう場面を後世に残して、若い人々に見て貰いたいと切に思う。

### 八、21世紀への遺言

平成7年6月に、発起人として坂垣正、田久保忠衛、郷田豊、名越二荒之助の諸氏がなり、今日の歪んだ歴史観を是正し、東京裁判の侵略の汚名を濯ぎ、真正日本の歴史観を希求する事を目的として、戦中派が自分の体験を通しての事実を21世紀の若者に訴え、民族の熱い息吹を感じ取ってほしいとの、趣意書が配られ原稿募集が始まった。応募者は大正八年前後の戦中派が多く、その体験記録は烈々たる愛国心に溢れ、民族的情熱が脈打って胸に迫るものを感じる、力作が多いのは誠に頼もしい限りである。

これは戦中派出版協会が「21世紀への遺言」として、平成8年1月に発刊し定価千五百円で市販しており、今日まで三版と版を重ね好評である。

### 九、一億人の為の辞世句集

これは昨年産経新聞で、「一億人の為の辞世の句」を募集していたので、早速応募した。蝸牛社発行の坪内稔典選で表記の句集が贈られた。内容は七百人程の「辞世句」が一人一句で掲載

され、選者が簡単に評を書いているが、中々に手厳しくユーモアに富むものがあった。二三句掲載する。

冥土から赤紙の来る年齢となり  
蒲公英や天国でやる草野球  
出迎えは釈迦か閻魔か春の闇

### 十、孫たちへの証言集

私は「孫たちへの証言」と題する特別号・21世紀への伝言(第13集)なる本が、平成12年8月に(株)新風書房(企画・編集・福山琢磨)より贈られて来た。内容は1・国内での体験 2・国外での体験 3・亡き人達の証し 4・戦後、それからの私たち 5・21世紀への伝言と編集されている。そして編集者の福山氏は後書きに「一人で何冊も買ってくださり、地域の公民館や学校へ献本したり、或いは知人友人に贈与したりして、広く読んで貰える事が一番嬉しい。」更に「一編の文章では届かなくても、八百余編から選んだ九十余の証言集であれば、歴史の一コマになり得る。そんな思いで今回も編集した。」と述べている。福山氏のこの文章が、後世、平和に中毒症状の特に孫達に、曾っては一兵士であった庶民の声を聞くよう警鐘をならしているのだ。

今回の八百余編の応募者の県別の調

直では、何と全県に及んでおり、カナダ・オランダもあった。又年齢別では矢張り60代70代80代が断然多かった。尚、前記新風書房は、昭和の終わりに「孫たちへの証言集」を毎年一冊づつ発刊している立派な実績があり、平成13年3月締切りで「孫たちへの証言第14集」の原稿を募集している。

#### 十一、陸士第五十三期生著「鎮魂」

この本の開巻第一頁に、靖国神社の写真と終戦直後に下賜された「帝國陸海軍人に与うる勅語」が掲載されている。内容は、中隊別に戦没者の顔写真、略歴、戦死の模様を記述している。私も同期生なので五十余年を経て「鎮魂」を編いて、戦死した彼らに呼びかける時、遺影もまた何か「やあ、小崎！」と声を掛けてくる錯覚に襲われるのを覚える。

前書きに「終戦の勅語により矛を収めた。それまで、特別攻撃を始め幾多の戦闘に倒れ、或いは病没して生還出来なかった同期生は六百余名に達した。……中略……此処に歴史の礎となった個人の遺影を掲げ、戦歴の一端を留めて限らない哀悼の誠を捧げるものである。」と述べている。

特に航空第三中隊の重爆撃区隊の三十名の、生還者は何と僅か三名と言う

実に凄まじい犠牲に、我等は愕然として絶句した。同期生の諸兄が如何に激闘したか後世に語り伝える事を痛感して止まない。特に航空自衛隊の若人に継承したい。

#### 十二、昭和殉難者法務死追悼碑の写真集

この写真集は、「所謂BC戦犯と言われる死没者千七百七十四名の追悼碑の写真集である。」戦友関係者によって和歌山県の高野山に建てられた。

序文の解説によれば東京裁判は、A・平和に対する罪、B・通例の戦争犯罪、C・人道の罪に分けて、東条大将以下七名をA級戦犯とした。しかし広範なアジア地域では、連合国が無統制にBC戦犯として、四千余人が有罪判決を受け、九百二十人が処刑されたと言った。この裁判は怨恨や復讐に満ち、勝てば官軍式の極めて杜撰なものだったらしい。それは憲兵や俘虜収容所長らが多い事でも推測される。序文の末尾には、「我等戦中派の生き残りの有志は、刑死・獄死したBC戦犯を『昭和殉難者』として永遠に鎮魂する為、聖地高野山の奥の院に追悼碑を建立した。」と述べている。これには相馬原会（前橋陸軍予備士官学校OB会）の会長長野政次氏の絶大な献身的努力を忘れてはならない。この写真集も大変立派なもの

である。此処高野山は、古来戦国武将や大名の墓がある所で、殉難者達の追悼碑は大変好適な場所である。

#### 十三、人間魚雷「回天」

昭和51年3月発行の「回天」の序文に、「……前略……回天の勇士の霊前に捧げて御遺族を慰めたい。生き残りの回天搭乗員や関係者にとっても『共に戦った』記録として、子や孫に残してやりたい。回天の勇士達の純粹な愛情を若い人々に感得して貰いたい。」と述べ更に、「現在も将来も若い人々によって、『神風』や『回天』の勇士達が如何に國に殉じたかを、感じ会得して貰えるならば、彼らの死は榮光に輝き慰霊が全うされ、その偉業は顕彰され継承されるものと思う。」と述べているが、誠に同感であり諸手を挙げて賛成である。この本は、回天の創業、訓練、作戦、研究実験等も詳述しており、顕彰の部では三十頁に渡り遺影を掲げており誠に圧巻であり、六百頁の大冊である。

遊就館前には、実物人の回天が展示してあるが、余りにも小さいのにびっくりした記憶がある。尚、回天の発祥地の山口県の大津島と東郷神社には夫々立派な慰霊碑が建てられてあると言った。又広島県の江田島にも回天が展示され

ていると言った。

#### 十四、奈良県で「戦争体験文庫」開設

平成11年末に奈良県では、「戦争体験文庫」を開設するとして、戦争体験記や戦争に関する図書、日記等を広く一般に募集していた。私も早速趣旨に賛成なので、数十冊寄贈した所、柿本善也知事の礼状の他に、担当者から次のお願いがあった。前略……お蔭で平成12年2月末で約二万点の図書などの資料を集めさせて頂きました。……中略……お知り合いの方にも、本県の「戦争体験文庫」に対する取組をご紹介頂きたい。宜しくお願いますと。私はこう言う地方自治体が、公民館や図書館とは別に、独自に「戦争体験文庫」を開設して市民に対して開放している事は、21世紀を切り開く新しい試みとして、他の自治体にも波及する事を願っている。

#### 十五、結び

今年も全国戦没者の慰霊祭は、天皇皇后両陛下をお迎えして武道館でしめやかに執り行われたが、靖国神社には森総理大臣の外大部分の大臣、代議士は今年も参拝を見送ってしまった。政界がかくの如きは誠に残念な事である。所で教育界はどうか。間口を決めて



教科書の一端を覗いて見れば案の定、実にお寒い限りだ。現行の日本史B教科書は十九冊あるが、日露戦争に関する歴史的事実は、奉天戦の会戦・日本海会戦・バルチック艦隊等について、殆どの教科書が概略記述している。しかし東郷平八郎の事は、十九冊の内三冊、旗艦三笠については「最新日本史」だけだという。一体これはどう言う事か理解に苦しむ。しかも小学校の学習指導要領には、歴史上取り上げるべき人物として東郷平八郎を挙げておきながら、高校の教科書には殆ど取り上げていない。それが内山鑑三、堺利彦・与謝野晶子など反戦平和の徒はデカデカ掲載しているのは何故か。我等は21世紀の子供らに、我が国の正しい歴史、戦争観、愛国的人物、民族的息吹、国家的価値観等について、伝統を継承し受け継いで貰いたいと切に願う。

借行社（陸軍士官学校OB会）では何万冊かの蔵書を、靖国神社の了解の下に借行文庫を寄贈して、広く一般の人々に開放している。

又防衛庁として、全国の陸海空の駐屯地に「防衛資料館」として、郷土部隊の日清日露の戦役を始め、大東亜戦争に至る迄の、先輩達の戦闘振りの歴史伝統を後輩に伝える資料を整備して、一般に公開している事は、当然の事な

がら素晴らしい事である。若い自衛官は勿論、一般の若者達も見学を勧めて止まない。

産経新聞は、司馬遼太郎著「坂の上の雲」の日露戦争の場面を掲載していたが、現在は、「あの戦争」と題して日曜版に、大東亜戦争の個々の場面を連載して、八月に既に百九十回を越すに至っている。私は何回か切り抜きを保存している。こう言う企画の連載も、過去の断絶を継承し、忘れていたものを蘇らせ、当時の国民の息吹や血潮に触れて、色々な場面を偲び記憶を鮮明にしてくれる。

私は今まで過去を顧みて、同僚先輩達の遺書・遺言・遺詠・辞世等を読んで、断腸悲憤の血涙を濯ぎ、幾多の慰霊祭に参列して合掌し追悼の誠を捧げて来た。傘寿の坂を越えた今日、百年後の日本を夢見て後輩や後世に何かを残したい気持ちには、日増しに増長するを禁じえない。

古来日本は八百万の神の国であり、天皇を頭首と仰ぐ敬神崇祖の文化的遺産を尊重して、戦没者の慰霊追悼は国家行事とし、アジアの盟主としての使命を果たさん事を念じて所懐の一端とする。

## 大東亜戦争忠魂 顕彰五十九年祭

我が協会の相談役の金城和彦氏の主催するこの祭祀が、今年も12月8日に靖国神社で行われた。このことは既に何回か会報で紹介したが、いつも感に堪えないのは、祭文奏上をはじめ表立った役割は若い人が担当していることである。顕彰行事はそうでなければならぬ。

余談ながら、前号に掲載した「特操出身者は語る」で質問者となった大学生は、金城さんに紹介してもらった人達で、恐らく参列者の中にいたことと思う。

金城さんは案内文に添えた趣意書で次のように述べておられる。

もし彼るとき、我が日本の決起がなれば、亜細亜諸国の解放は、いまも恐らく実現しなかった筈であります。思えば大東亜戦争は、このような尊い使命を担ったものであり、それは二百万余の忠魂により達成され、そして我々はその御加護によって、現在の繁栄と平和に生きることが出来ているのであります。云々と。

この祭典の紹介はこれまでとし、ここに一言私見を申し述べれば、

## 十二月八日を記念日として 取扱うことを提唱する。

かつての陸軍記念日や海軍記念日は、日露戦争に於て大勝を博した一會戦を記念する日であって、戦争を終結した日ではない。現在八月十五日を終戦の日として戦没者慰霊の催が行われている。それに異を唱えるものではないが、かつての陸軍記念日や海軍記念日のように勇戦奮闘した人々を讃える記念日が、あってもいいのではないか。その日を求めれば十二月八日を措いてはならない。

この日は陸軍はマレー半島上陸に成功した日であり、海軍は真珠湾攻撃に偉勲をたてた日である。我が国の歴史にこのような輝かしい一ページがあるのを、若い人に教えることは、愛国心の涵養に役立つであろう。更にまた我が国は何故戦争に突入しなければならなかったかを知らしめる機会にもなり、ひいては東京裁判史観の打破につながる。

私どもが子供のころは、まだ日露戦争の従軍者が大勢いて、記念日には学校で戦の話聞いたものだった。平和な時代だったが、血沸き肉躍る思いで愛国心をかり立てた。そのような環境になればお国は安泰だが。

## 特攻隊員の手紙②

## 「原町戦没航空兵の記録」より

皇魂隊長

## 三浦恭一

陸士56期 中尉 21才  
2式双襲 20・1・8 リンガエン湾

昭和19年10月20日、銚田で編成完了

したが、整備や悪天候のため11月29日飛行場関係者見送りの中一二機の編隊を組み大阪に向かった。大阪では故障機多発の状態であったが全機揃って比島に赴くと、隊長の意向があり、屏東經由クラーク基地にいたのは12月24日。25日不時着により二名を失ったが、他はアンヘレス飛行場に到着、展開して出撃準備をした。20年1月6日夕刻桑原少尉以下四機が薄暮攻撃を行い、本隊は1月8日朝三浦隊長以下四機が出撃し、リンガエン湾に散華した。更に一機は1月10日ルソン島西方の海上で輸送船団に特攻攻撃し、皇魂隊は消滅した。

弟よ遂に凜々しい姿を見ずに行くのかなしかしこの間も書いたが 間違ひな

く 立派な青年将校

になってくれ ある

ひは 出発に少し間

があるから 行かれ

るかも知れぬが 兄は部下十一名の隊

長だ 察せられよ

出発は二十六日以降の予定 行くと

きは その双発戦闘機が 振武台の上

を通って行く 時刻は十時以後だらう

か 仰がれずば ただ 心の中でも見

送ってくれよ

その最先頭にあり

柄として明らかなる任務 必死の二

字に尽きたる結果だよ が 兄は喜び

勇んでいる やるぞ 大いに 八

紘第十一隊の名にかけて

もし 兄の死が輝くを得たならば

その名を重んじて励んでくれ

兄に会ひたくば 明春 靖国の宮に

来たれ 若桜はきれいに咲いてゐるだ

らう 三浦隊十二名の枝を揃へ絢爛万

朶の紅を呈すべし

軍隊に入つては 我がまが利かぬ

それから自らを持せ といふこと

これは欲に克て といふこと

とにかく生徒の間は 校規 あるひ

は酒色など 絶対間違ひあつてはなら

ぬ 持ち前の正道 純真を伸ばし 徒ら

な怒りを抑えて耐えて行くのだよ

修業者は修業者として 幾年か後ま

で その立場がある

もし お役に立てる日には どうぞ

よき死所を得てくれ 最後まで忠の

一字と名を惜しみて

今日は 雅夫の誕生日だったね 家

では兄と二人の写真の前に 御馳走が

並べられたであらう 一緒にいただけ

してもらうよ

今は いふことなし

身はたとヘレイテの空に水漬くとも

また天翔り 敵ぞ屠らん

昭和十九年十一月二十三日 恭一

雅夫殿

(この両親及び弟宛遺書は、銚田出発

後受領したもので、基地発進に際して

の決意と今生の訣別を告げ、後事を託

したものであった。)

△郵便―屏東より御両親宛て最後の便

り―▽

天氣に恵まれず、しばし、新田原、

那覇に留まりました。いよいよ十二月

も、あと半月、昭和十九年とともに、

この世を去る生命ながら、ただ、その

機を待つ間、無上に、もどかしい次第

です。

戦いは激しくなる一方です。逆境に

立て、しかも、真に皇国の永遠の生

命を信ずるは、決して並々のものでは

死に臨んでゐる私達ですが、とにかく

五年間、鍛えて今日に至つた私は

さておいて、十九や二十で喜んでつい

て来てくれる部下こそ、偉いと思ひま

す。

あまりにも明白である将来であるし、

決定の身体でしたので、これをお知ら

せしたものがどうか考えましたけれど

も、いざれ判りますことですし、永遠

の生別ですから、肉親の苦しみを察し

つつも、壮行の辞をお渡しいたしまし

た。

「親思ふ心に勝る親心 今日を訪れ

何と聞くらん」

といふ松蔭先生の歌こそ、いま、身に

沁みます。今ごろ、如何なる思ひに在

はすでせうか。

お待ち下さい。今、しばらくを。

基地のラジオで先の八紘隊の出陣の

状況、その他を聞きました。

われわれも、幸い、武運めでたく成

功の暁には、あのとおり、銚田出発の

状況を伝えられるでせう。

国が栄えるか、亡びるかです。われ

われは、一機こそ、皇国の生命を一日

延ばすものなりと、考えていきます。

子供のころより、御両親の御葬式も

最大にして、立派な御墓を建てて差し

上げたかつたのですが、先立つ不孝を、

何とぞお許し下さい。

思へば、決して長くはない生涯でした。しかし、すでに、この世に生まれ出るときに、神様は二十二歳で死ぬことを、お示しあったわけでしょう。今は、何も残さうとは思っておりません。

今、最後の故国を後にして、前線に出でんとし、南十字の星近い台湾屏東の夜、静かに想ひを得るは、恐らく今夜限りでありませう。

私たちが、決して決して、特別の名を大きくいひ得るかどうか判りません。一步一步の前進に、限りなき喜びをたへて、幽明、ともに皇国守護に邁進いたします。

御両親様、御一同様、強く強く生きて下さい。発表の後、しばらくは、人情濃きところでも、とき経てば薄らぐんとするは世の常です。思ひ起こして、立派に隊長の家族として御下下さい。私の後には、無窮の団体と、大本営と、一億の同胞と、十一人の部下と、肉親の方々がおられます。特攻隊の名を、死して始めて任務が達成できるに於て、生きるでせう。

さらば、永遠に、さようなら。御機嫌よろしく。

十二月下旬 於屏東 児 恭一

## 特攻隊の裏方

飛行第一〇八戦隊

菱沼 俊雄

编者註 24号に「記憶に残る万葉隊のこと」という記事があるが、これはその続きである。機種は双発高練。

### 特攻誘導につくべし

三月二十五日には、ついに敵が慶良間に上陸した。すでに沖繩へ進攻を開始したのである。特攻機はいっさいで沖繩へ殺到していく。九州から、宮古から、石垣島から……。二十九日は各務原出発予定の日であった。

試験飛行を根岸軍曹にたのんで、ピストで休んでいるとき、新田原の戦隊長より至急電報をうけとった。内容は「特攻隊誘導機として任務につくため、二十九日午後一時までに新田原に前進せよ」というものであった。

私の部下たちはもちろんのこと、まわりにいた他部隊の人たちや電報班の者までが、緊張した目を私にむけた。いよいよ、オレの番がきたぞ。「時こそ来たれ」……これが、このときの私のいつわらざる実感であった。

レイテでは、多くの同期生が特攻隊

長として戦死している。また、こんどは、内地にきて会った同期生のほとんどが特攻隊長であった。

六二戦隊の渡辺少尉（仙幼で一期下の57期）のごときは、この二十二日、西筑波からキ67（飛電）で出撃し、遠州灘沖に敵機動部隊をもとめて特攻を敢行しようとしたが、天候不良のため離散し、一時、各務原に不時着したと

のことで、機体には弾痕があり、射手も負傷したという生々しさであった。

私は輸送機に乗って、安かん（でもなかったが）と飛びまわっている自分の立場が心苦しく、時には肩身のせまい思いさえしていたのである。したがって、この電報をうけとってからは、急に肩の荷がおりたような軽い心持になった。

しかし、試験飛行をするまでもなく、ブレーキや尾輪の切損、降着装置の故障などによって出発を延期せざるをえなくなり、二十九日と三十日は那加町（岐阜と各務原のあいだにある）の航空兵站到泊したのであった。

当時、新田原、各務原、立川などには、特攻隊員を主とする空中勤務者専用の航空兵站宿舎があった。いずれも食糧事情の悪いころだけに、国民大衆にたいしていささか申しわけない感があったが、宿舎では、できうるかぎりのご馳走をつくって最大限のもてなしを

してくれた。

われわれの間では、俗に「特攻給与」といわれていたが、桃園の兵站宿舎の主任をしていたある軍属は、私たちに他の宿舎の給与状態をたずねては、桃園の給与こそ日本一とほりきって、改善をおこたらなかった。しかし、これは桃園ばかりのことではなく、新田原、各務原でもおなじであった。

女子軍属や挺進隊員の娘さんたちも、親身になって行きとどいた世話をしてくれた。そこには、数日を待たずしてみじかい生涯をとじるわれわれ将兵へのあたたかい同情が、自然とそのような雰囲気をかもし出したものと思われる。われわれが将校食堂で「特攻給与」をとっていると、給仕のオバサンが、かつて特攻隊長としてここに泊まり、そして出ていった同期生のことを、いろいろと話してくれた。そのなかに、大櫃、広森、山本などの名がひんばんに出てきたのを思い出す。

三十日の夜もB-29が名古屋地区に來襲し、その爆音や爆撃音が遠く近くに聞こえ、各務原の飛行機が心配になった。

翌三十一日、朝になって飛行場にゆくと、ぼったり浦井軍曹と出会い、私は夢かとばかりおどろいた。飛行三四戦隊時代に、彼は私の機関係で、つね

に行動をともししていたが、『薫空挺隊』の編成にともない飛行二〇八戦隊に転出した。そしてつい最近、比島を脱出して帰還したばかりで、現在は所沢において機種改編中という。

薫空挺隊の出撃のようをはじめとして、結婚一週間で出陣し、一つの香水を新妻と二つに分けて持っていた大沢正弘中尉(陸士56)が高熱をおかして軍刀一本をたずさえ出撃したこと、整備班長鹿兒島中尉(陸士56)以下整備班の主力はルソンの山中にこもって奮闘していることなど、浦井軍曹はその後の状況をいろいろ話してくれた。名残はつきなかったが、先をいそぐままに私は九時すぎ、各務原を離陸した。新田原についてみると、格納庫も、兵舎も、本部の建物も空襲で手ひどく破壊され、本部は飛行場の西北隅にあるバラックにうつっていた。

当時、新田原では福沢参謀が「誠」連絡所長として特攻隊の指揮にあたり、八紘荘を宿舎とする特攻隊員は、天候や敵情をみてはつきつきに発進していた。

私は戦隊長への報告をすませたのち、とりあえずは特攻隊間の連絡にあたることになり、福沢参謀(元独立第二十五飛行団長)の指揮をうけて、その夜は八紘荘に泊った。

### 若年化する指揮官

明けて四月一日はいそがしい一日であった。朝、第八飛行師団や特攻隊の連絡将校をのせて出発、まず熊本県隈ノ庄におり、つづいて菊池、さらに太刀洗まで前進した。ここでは鈴木編隊が整備中であつた。私も各務原へいく前は、太刀洗にしようかとも考えたことがあるが、またもやB29の爆撃により、太刀洗は大きな被害をうけたのであつた。

格納庫や分廠の施設は破壊され、飛行場のいたる所に飛行機の残骸が散乱しており、着陸にはだいぶ神経をつかわせられた。

どうにか着陸して鈴木たちに会うことができたが、不運にも今回の空襲ですべての乗機が爆破され、人員のみがかるうじて助かったというありさまであつた。

私は鈴木と一しょに台湾へ帰ることを約して太刀洗を離陸、菊池をめざした。さらに健軍、隈ノ庄にも立ちよつて連絡をすませ、新田原にもどつたのはすでに日没時であつた。

報告をすませると、戦隊長は、「明朝、敵艦載機の来襲する公算が大であるから、どこか適当な基地へ退避するように」といわれるのでやむな

く健軍へむかうことにした。すでに夜となつていた。

健軍には三菱の工場があり、キ67四式重爆撃機「飛竜」を組み立てている。飛行六十戦隊がキ67へ機種変更のため、健軍に進出していた。また、ここは隈ノ庄飛行場大隊の分遣隊がおかれ、隊長の広森少尉は、くしくも岐阜で会つた広森中尉の実兄で、われわれにたいしても、なにかと親切に便宜をはかつてくれた。

しかし、弟の広森達郎中尉は、私と岐阜で別れた一週間後、沖繩特攻の戦陣をうけたまわり、誠三十二隊長として十機十艦突入のかがやかしい、戦果とともに、慶良間の海に散つたのである。彼は健軍に一泊して兄上との訣別をすませ、新田原か知覧のどちらかの特攻基地から出撃したもようである。

私はその夜、熊本城そばの研家支店に泊まり、翌二日、トラックで飛行場にむかつた。飛行場では、六十戦隊の通信将校の伊東英城、帯広でキ67に機種変更をするという七十四戦隊の藤原幸三郎、陸士五十七期の花谷成功など、航士時代の級友と再会した。

畠には黄色い菜の花が一面に咲き、おい、麦の穂の明るい緑とまざりあって、春まっさかりを思わせる光景がひろがっている。この明朗な風景に目を

うばわれ、暗い戦争の影はたんなる幻覚にすぎぬのではないかとさえ思えてくる。そのほか、航士時代おなじ中隊であつた小林少尉に会つたが、彼は誠三十九(?)飛行隊長を命ぜられ、落下傘のぼく帯に「九段隊」と黒書した白い布片をつけ、いかにも戦闘機パイロットらしく、精悍な闘志にあふれていた。

これらなつかしい顔に別れをつけ新田原にもどつたが、こんどは西参謀を乗せて、また熊本まで運んでほしいという。これには、いささかうんざりしたが、幸いにも中止となり、その日のこりは、以前から気にかけていた羅針盤の修正をおこなうことにした。

四月三日、私はまたも第八飛行師団の連絡将校をのせ、鹿兒島南端の知覧に飛んだ。これは知覧で待機中の「と号40」(誠四十)飛行隊を、新田原に呼びよせるためであつた。

こんなことに、貴重な飛行機をつかわなくてもと思われたが、実際には爆撃のために電話が不通になり、軍用電話も福岡の西部軍を經由していくので、緊急の用には間にあわないからだとのことである。ところが、この誠四十飛行隊は、われわれが知覧に到着したときには、すでに新田原へむけて出発しており、まったくの無駄足におわつた

のである。

その夕刻、私は新田原基地で誠四十の出撃を見送った。隊長も、隊員も、みな紅顔の若武者ばかりであった。かれらのおおくは、学業なかばにしてペンをすて、操縦桿ににぎりかえた学徒出陣の青年たちである。

私たちは無限の感激をおぼえるとともに、その機影が南の空に消えゆくまで立ちつくしていた。

このころ、南九州の基地から発進する特攻機には、九七戦やその改造型の二式単高練、九九高練など実戦むきでない機体がおおかつたように思われた。いずれも機体には、桜花に爆弾を配すなど、思い思いの部隊マークをえがいていた。また、搭載する爆弾は、百キロ爆弾二コぐらいがふつうであった。

隊員は、隊長などは学徒出陣で陸軍の特別操縦見習士官や幹部候補生を志願した将校がおおく、下士官も若い少年飛行兵や予備下士官が大部分であった。年齢的にみても、十八、九歳から二十二、三歳が主力をなしていた。

これは、熟練した操縦者のおおくが、それまでの激戦でうしなわれ、現存する数すくないエキスパートを第一線航空部隊から抜きだして、一回きりの攻撃しかできない特攻隊に配したのでは、沖繩、本土の決戦をひかえて、わが航

空戦力をまったく無力化することを意味するからであった。他方、戦局の逼迫により、十分に訓練をおこなえず、特別の戦技を身につけていない、いわば飛んでいるだけの若者たちを特攻につかう方が、上層部にとってはたしかに合理的だったかもしれない。

現実にはこのころになると、従来、大佐や古参の中佐級が任命された重爆戦隊長も、陸士五十一期の若い少佐がなっていた。戦闘隊長には五十三、四期各隊の中隊長に五十五、六期と、戦前にくらべると指揮者の年齢は飛躍的に若くなっていたのである。

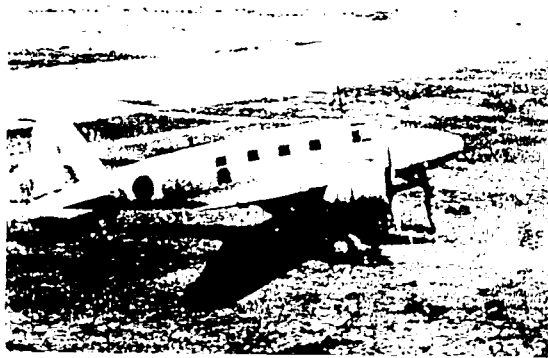
前線にでたばかりの五十六期も、かつて山本薫が話してくれたように、レイト作戦のころまでに大部分がうしなわれ、沖繩特攻では、九九軍偵、一式戦、九九双軽などの実用機で編成した大規模な特攻隊の隊長にのみ陸士出が命じられるのが通例で、末期には五十七期生まで隊長として参加したようである。

三日の深更になって、汽車便で鈴木中尉の一行が太刀洗から到着した。四日午後、誠三十一、武揚隊の一同とともに分廠の大型バスで宮崎神宮に参拝し、古式にのっとって出陣式をおこなった。隊長の山本薫中尉(陸士五十六期)以下特攻隊員と、福沢参謀、鈴木中佐

(新田原飛行場司令官)、古川戦隊長らが神前にならび、土器で御神酒をいただし、スルメや昆布、神苑のミカンをそなえ、神官のおほらいをうけ、心から必勝を祈願したのである。

そのおり、社務所そばの庭で婦人たちが竹槍の稽古をしているのを目撃し、いよいよ本上決戦のせまったことをひしひしと感じたのであった。

その夜、八紘荘では武揚隊がさやかな宴をほって壮行会がおこなわれていた。一方、私はこの特攻隊を台湾の基地まで誘導せよ、という命令を受領した。



双発高練

### 協会発行の書物等の頒布

戦没特攻隊員の精神を後世に語り伝えるため、協会では次の書籍等を作成して頒布しております。

会員の皆様、これらを座右に備えると共に、身近な人に訴える資料として活用して下さい。電話・葉書・FAXでお申込下されば、郵便払込用紙を同封して現品をお送り致します。頒布は送料別。

#### 〔小冊子〕

○遺書遺詠に偲ぶ特攻隊員の心情  
A5版 60ページ 六〇〇円

○特攻隊員の日記  
A5版 70ページ 七〇〇円

#### 〔単行本〕

○B129との戦  
A5版 161ページ 一、五〇〇円

○特攻隊遺詠集  
A5版 211ページ 二、〇〇〇円

○愛は終りなく  
沖繩洋上に散華した特攻隊員と将来を約した一女性の回想記

A5版 209ページ 一、五〇〇円

#### 〔ビデオ〕

第一御橋隊と義烈空挺隊  
二本立て約五〇分 五、〇〇〇円

## 元第一挺進団長

中村勇大佐の手記

## 義烈空挺隊の遺品に憶う

中村勇大佐の手記は「義烈空挺隊の健軍飛行場出撃を見送る」と題して、この会報23に掲載したが、この人と義烈空挺隊との関係を重ねて紹介すれば、義烈空挺隊の奥山隊を差出したのは第一挺進団である。挺進団長の中村大佐（陸士36期故人）は、指揮下にはなかつたが出撃準備間健軍基地に在って指導に任じた。この手記は昭和36年に書かれたものである。

## 久遠に生きるもの

思出こもる遺品の中に座して、一つ一つ丹念に整理検討を重ねていると、いつも間にか20年の歳月が逆流して「まなじり高きつわもの、いづくか見ゆる幼な顔」がまざまざ浮き刻りされる。殊に今でもなお、生々しい血色の香のただよい残る7枚の血書に對すると、若い特攻隊長たちの悲壮にも「大東亜戦争を解決するものは、若き力にあり」と断じた覚悟の程が、爾々と昔を今に生きてくる。数多い遺品中

特に胸打たる、若干点について解説したい。

奥山義烈空挺隊長の最後の手紙  
（原文のま、）

津市中河原、野口閣下の裏辻岡氏子息創君も陸軍少尉として私の部隊に活躍中であります。

宛名 三浦県津市小森一一五六  
奥山スエ様  
宮崎県児湯郡川南村西部第9944部隊  
奥山 道郎

「昨年11月末以来文通不通にて御母上様にはさぞ御心配下されたこと、思います。特に縁談につき屢々御使り電報まで戴きながら返事することもできず失礼して居りました。戦局激烈を極むる今日軍人としては当然のことにて御母上様も御賢察のこと、存じます。

実は私事〇〇隊長を拝命各地を転々として居りました処一時当地に戻り安藤様に御会いしたわけでありませぬ。爾来又ずつと便りもできませんが道郎は極めて元氣旺盛にて軍務に邁心して居ると思つて居て下さい。

授婚姻の件でありますが現戦局下以上の様なわけで、夫婦生活も到底できず、私の生命も保証できません。婚姻しても相手方に御迷惑をかけるばかりです。相手様には重ね重ね失礼致しましたが御母上様よりよろしく婚約取消し御願ひします。御亡父様一周忌には遙るか遠方の地より合掌させて戴きました。

御母上様初め皆々様の御多幸を祈ります。

昭和二十年三月九日 道郎

御母上様  
二伸

この最後となった書翰は、すえ母堂の格別な好意によって、今回初めて門外公表されるもので、はなはだ迂闊干万な次第であるが筆者自身も、この手紙によって初めて奥山隊長の婚約がこんなに進んでいたことを知って驚いたのである。日附当時の義烈空挺隊の状況は、已に述べているように、昭和十九年十二月二十五日クリスマスを狙った。B29の本拠サイパン島の寝込みを襲う破天荒の壮挙が延期中止され、長恨を呑み傷心を抱いて、川南の古巣へ帰還していたのである。「元義烈空挺隊分隊長和田准尉の手記に「……あまりに長年月に亘り道草ばかり食っているので、ホームシックにかゝる者も若干出てきたのも仕方ないことであつた。……こんどどうしたらよいか流石の奥山隊長も少しやせたようだ、……」とある如く、若い隊長の統率特に家庭を持つ隊員に對する苦心は並大抵ではなかつた。和田手記には更に「……ある日のことである。兵舎の裏にあつた小さいコンクリート製の小池の中の金魚を見ていた隊長は、突然「当番！お湯を持って来い！」といわれた。そして「お前たちもこの中で苦しいことだらう又寒いだらう！」とい、ながら熱湯を小池に注いでいたのを見たが隊長の氣持がよく解るような氣がした……」と書かれているのでもわかる。

この間にあつて、先ず自分の婚姻に對する最後の覚悟ともなつてこの手紙である。若い特攻隊長の見事な、心にくいばかりに磨きあげられた嗜みを理解するためには、今迄不明になつていた、奥山隊長の婚姻に對する決意の動機やその他を探求せねばならない。幸にも此度遺品と共に筆者に寄せられた。すえ母堂の書翰の一節に「……出撃いたします直前11月に休暇をいたゞき突然帰りました、上司の御言葉で「嫁をもらつて来い」と申されたからとのことうよう婚約ができ、手紙を出しましたから返事が参らず、どこに居ることかわり、困つて居りましたら、最後の御便りで初めて様子がわかり、先様へ御

断りいたし未亡人にせずすみました。……」とあるのを思い合せると次ぎのようになる。

奥山大尉の所属する第一挺進団(岡長河島慶吾大佐)挺進第一聯隊(長山田中佐)第二聯隊(長大崎少佐)が二度目の出動であるニューギニア、スマトラ方面から内地へ帰還したのは昭和十九年初秋である。帰還直後陣中の小閑を利用し当時の挺進団長や両聯隊長の心遣いで、未婚の将校を帰還せしめたことがある。

出征中の十九年二月敵父を失っていた奥山大尉も墓参ともども帰郷した。上司の意図もあり二十五才の適齢期でもあったので、奥山大尉はその旨を母堂に告げたのであろう。

夫君を失い淋しく留守を護って居られた母堂が、長男からこれを聞いて、どんなにか喜ばれたことか想像にかたくな。今から考えると、嬉しい弾んだ心で帰隊した奥山大尉を待っていたもの、それは「サイパン陥込みの隊長」の任命であった。そして間もなく川南から豊岡航空士官学校に転進し、已に設備されていた、B29の実物大模型と真向から取り組んでの爆破訓練に没頭していたのである。この事情を知る由もない母堂側では、寝食を忘れて「嫁さがし」に没頭されたことだろう。あ

れ程望んでいた我が長男の好配偶者がやっと見つかったとき、一刻も早く知らせたかった親心は度々の手紙となり電報ともなったのであるが、梨の蔭で何の音沙汰もなくたってから、はや四月、板挟みならぬ隻手の声の一人相撲で、いかに苦慮傷心されたことだろう。がそれにもまして一切を黙殺せねばならなかった、人一倍孝心深い奥山隊長の苦衷の程が音をたて、しのばれる。そしてこの最後の手紙となったのである。

かゝる人生の重大事をたゞ一人胸中深く蔵して終始微笑を忘れなかった、めに、半歳の長い間、日夜寝食を共にした一五〇名にのぼる隊員が一人もこれを悟らず最後までこの事情を知らずに、返って、これに類する数々の悩みを隊長に背負せながら、一転二転、特攻の龍児が特攻の孤児とまで自嘲しながらも三転遂に沖繩北中両飛行場に胴体着陸を政行して共に玉砕している。

この様に、若い特攻隊長が深刻な苦惱を、ただ一人で見事に処理した非凡な嗜みの程を、看取し得ず戦後十有七年始めて、この遺墨によってその心情を知るの愚を旨す。その迂闊愚鈍さ、穴あらば入りたい気がする。奥山隊長の一挙一動を更めて回想するとき肅然として畏敬さえ感ずる。

奥山隊長の遺書

奥山隊長の遺書には、すえ母堂宛と愛弟弘道宛の二通がある。

遺書

昭和二十年五月二十二日

此の度、義烈空挺隊長を拝命御垣の守りとして敵航空基地に突撃致します。絶好の死場所を得た私は日本一の幸福者であります。只々感謝感激の外ありません。

幼年学校入校以来十二年諸上司の御訓誠も今日の為の様に思われます。必成

以って御恩の萬分の一に報ゆる覚悟であります。

拝顔御別れ出来ませんでした。道郎は喜び勇んで征きます。

二十有六年の親不孝を深く御詫び致します。

御母上様

道郎

これは義烈空挺隊の発進は当初五月二十三日と決定されていたのでその前十二日に書かれたものである。

遺書

兄は特攻隊長として只今出発する。

我がなき後奥山家を継ぐべき者は弘道なり。

御老母様への孝養與々も頼む。

大東亜戦争を解決するものは若さの力にあり、若人は須らく公明正大、快活

無邪気たるべし。

散る桜 残る桜も 散る桜 兄に後続を望む

昭和二十年四月十日

道郎

弘道殿

陸軍最後、最高の決戦人事とも云うべき阿南陸相、河辺(虎四郎)参謀次長の就任が四月八日であり、これと同時に「関東九州を重点とする決号作戦準備が命ぜられ、内地防衛のため、第一、第二総軍、航空総軍の隷下となり総予備決戦兵力となった。従ってこの四月十日に沖繩義号作戦の内達があったようでもあり、川南から義烈空挺隊最後の練武地熊本健軍飛行場廠舎への転地開始の日であったのかなかお検討の余地がある。

この二通の遺書こそ奥山義烈空挺隊長の真骨頂を表わすものであり、神州不滅を確信し、忠孝一本悠久の大義に莞爾として生きた、昭和青年の真情を伝えて余すところがない。大東亜戦争を解決するものは若さの力にありと断じ而も血あり涙あり叡智にも輝き、後に続くものを信じた正に萬世に通ずる大文章である。筆者は今まで屢々奥山隊長を鎮四八郎為朝に擬して考えて来たのであるが、此の度遺書や遺墨を拝見検討するに及んで、更に先師吉田松

蔭の風格を思ふこと洵に切々である。血書と遺墨

統 け 実 行

渡部 大尉 宇津木中尉

狛鬼は米機でB29に通ずる。B29対策こそは大東亜戦争の最も重要な命題の一つであった。あの巨大な鯨尾そのまゝの尾翼を垂直につき立て、若い命をつみ重ねて挑むわが体当たり特攻機を蚊虻の如くあしらひながら、傍若無人に日本全土を無差別爆撃する空の怪物白鯨を、防空壕の穴からみつめる日本民族の怒りと憂いの目に耐えて、生れたもの、それがB29の寝込みを襲う、即ちサイパン根拠飛行場への殴込戦法であった。

根拠飛行場へ胴体着陸を企図したのである。 奥山道郎(陸士53期)を隊長とする義烈空挺隊と不二一体の特攻飛行隊は厳選の上諏訪部忠一(陸士54期)を長とする第三独立飛行隊と決定された。この飛行隊の特色は、その半数に近い幹部が陸軍航空士官学校第56期第57期を主とする花なれば若松の青年将校によって編成されていたことである。

義烈空挺隊長並びに各小隊長の血書7枚がある。特攻隊の戦闘に立つ、各隊長のなみなみならぬ覚悟の程が肅然と昔を今に生きている。そして所々にまなまし血痕がほの見えて、凄壮の戦きさえ感ずる。

必死必勝 頑張レ 平常心

菅田 中尉 村上 中尉 山田 少尉

祖国を遙るか南に去ること二千五百軒。太平洋上のサイパン。はりねずみのように防空兵器で防禦され、くもの巣のように四周に電探の編目を張る要塞に殴込をかけると云うのである。そして根こそぎB29を撃滅する。出来たら分捕りのB29で米本土を報復爆撃する、一見無謀極まる夢物語のような、この起死回生の壮挙、悲壮極まる祈にも徹した特攻を大本営が断行に踏み切った理由は、いろいろあったであろうが、挺進落下傘部隊の挺進特攻の気魄に押され、成功の期待さえ生ずるに至った、めでであるまいか。「空の神兵」と呼ばれていた空挺落下傘部隊の将兵が夢にも離さなかつた愛着の落下傘を爆薬に代えて、第三独立飛行隊の操縦する97式重爆撃機十二機に分乗して、サイパ

昭和十九年十二月十七日は、サイパン空挺作戦日が愈々十二月二十五日と決定された日である。

山 桜 母 童 心 和 親 爺

渡部 大尉 宇津木中尉 菅田 中尉 村上 中尉 山田 少尉

サイパンへの挺進特攻の気魄の凝り集まったものが、この一書である。しかも十一月川南基地から豊岡航空士官学校への進発に際し「B29全機を撃退し東亜十億の宿讎を討て！」との第一挺進団長の訓示にも呼応する武人の味しい心構も偲ばれてくる。

謝 恩

何葉ト頑張レKDの意気

これは奥山隊長を除いて五人の小隊長水入らず寄書で、垣根のとれた遠慮のない和やかさに溢れている。そして血は血を呼ぶのであろうか血に通うものが多い。これが本当の魂のさけびであつたのではあるまいか。

義烈空挺隊第三渡部小隊遺墨集 かねてより祈りし時に今会ひて 心の中ぞうれしかりける 小隊長 渡部 大尉

右三枚は各紙毎に昭和十九年十二月十七日挺進突撃隊長奥山大尉と署名している。

御垣守 挺進突撃隊長 奥山 大尉 清胡塵 渡部 大尉 殉国至誠 宇津木中尉 正義就道 菅田 中尉 挺進殉国 村上 中尉 断 行 山田 少尉

焼く 殉忠の至誠斗魂火玉となって敵を

爆砕靈駭 挺進突撃隊長 奥山 大尉 掃妖□(一字不明) 渡部 大尉 鉄石団結 宇津木中尉 掃一随順 菅田 中尉 挺進殉国 村上 中尉 純 忠 山田 少尉 御垣守 挺進突撃隊長 奥山 大尉

これは絹布に認められた唯一のものである。十二月二十五日今生の晴姿で愛機に搭乗直前、全隊員の決意を代表して、奥山隊長が書き遺したものである。

誠 心 大坂 井上 曹長 忠誠報国 福岡 森山 曹長 勤 王 小津川武士 松実曹長 大いなるみことをはいす今日よりは 神の子にして神を追うなり 石川 南 曹長

丸東亜十億の宿恨 昭和十九年十二月二十五日 挺進突撃隊長 奥山 道郎

丸東亜十億の宿恨 昭和十九年十二月二十五日 挺進突撃隊長 奥山 道郎

丸東亜十億の宿恨 昭和十九年十二月二十五日 挺進突撃隊長 奥山 道郎



殉皇	山梨	山本	曹長
誠一貫	石川	池島	軍曹
必勝	岡山	佐野	伍長
皇軍	徳島	杉本	伍長
神風	青森	齋藤	伍長
必殺	愛知	村瀬	伍長
生死一如	北海道	田中	伍長
誠	山梨	平石	伍長
忠烈	佐賀	松永	伍長
見敵必殺	遠洲	細田	伍長
必成	三河	加藤	伍長
若櫻	江洲	種田	伍長
戦勝	岩手	毛糠	伍長
忠勇	大分	岡本	伍長

身は滅ぶとも魂で撃つ  
和歌山 鈴木 伍長  
散るは花に非ず 日向 堀添伍長  
小隊長渡部大尉(陸士55期)の笑顔は天下一品であった。「笑ほどえたいの知れぬものはない」と云われる通り、笑っても泣いてるように見えたり、ぞつと寒けのするようなものもある。渡部大尉のは、全く天真爛漫そのもので、万人が思わずつり込まれて笑って仕舞うような笑顔であった。時には古参分隊長連を、ずらりと開いゴム林に並べて鉄拳を喰らわすかと見れば、小隊全員を集めて徹宵痛飲乱舞することもあった。この寄書には渡部小隊長の気風が溢れている。

大津島に於ける回天追悼の式典(参列報告)

評議員 小灘 利春

昭和20年8月、終戦を大津島で迎えた回天搭乗員たちは十年後の回天初出撃の日を期してこの基地に集まることを約し、それぞれの国元へ散っていった。

昭和30年11月8日、回天基地の跡に再び集まった搭乗員たちは戦没した仲間たちの慰霊祭を行い、以来地元有志が中心となって御遺族、関係者の参加も増え盛大となって年々の開催が休むことなく続いてきた。

終戦五五年目の平成12年度の回天烈士並びに回天搭乗戦没潜水艦乗員の追悼式は去る11月12日の一三三〇より徳山市大津島の回天碑の前で献花方式により厳粛に執行された。

国歌斉唱にはじまり黙祷、回天顕彰会々長の式辞に続き、山口県知事、徳山市長、徳山市議会議長、呉地方総監からそれぞれ追悼のことが述べられた。

本年の追悼式は遠く北海道の北端からの御参列を含め全国から戦没者二十柱の御遺族、三七人が出席された。高齢

の御遺族が多いが、世代の交代による新規参加ばかりでなく戦没者と同じ年代の御遺族で戦後初めてご出席になる方も年々あって、戦没者たちとの内に秘められた強い心の結びつきを偲ばせている。

回天記念館の前の道には両側に戦死者ひとりひとりの名前を刻んだ御影石の銘碑が並んでおり、すべてに花束が供えられていた。その前に跪いて祈り、語りかける御遺族、旧友の姿がいつものように見受けられた。

慰霊飛行の航空自衛隊、海上自衛隊の航空機のほか潜水艦「くろしお」が入港し、制服姿の乗員が隊伍を整えて参列した。一般参加者は天気予報が風雨であったため例年よりは少なく、式典参加者は今回三百人ほどであった。

雨は降らなかつたが全天低い雲に覆われて強い風が吹き、周防灘に面した魚雷発射場では寄せる波が飛沫を勢よく打ちあげていた。

追悼式の開催は毎年11月の第二日曜日に定められており、来年は11月11日になる。この日に参列される方は恒例の「大徳山太鼓・回天」が打ち鳴らす鎮魂の曲の徳山湾に響きわたる力強い音に感動を覚えることであろう。



碑文の一節

大東亜戦争 年ヲカサネテ苛烈ヲ加ヘ物量漸ク乏シキヲ告ゲテ 前途暗澹タリシ時 愛国ノ至誠 窮寇ニシテ早クモ危急ヲ豫感シ 忠孝ノ純情 一身ヲ献ジテ狂瀾既倒ニ回サントシ 前代未聞ノ兵器 必死必勝ノ戦法ヲ創業シテ 従容自ラ之ヲ操縦遂行セシモノ即チ是レ回天ノ勇士ナリ



徳山太鼓回天

## 終戦で未発に終わった 特攻作戦

### ―幻の滑空機特攻―

田中 賢一

#### 滑空機部隊と搭乗部隊の編成

挺進集団の中に挺進戦車隊という部隊があった。「ク」―7という巨大な滑空機に戦車を搭載し、敵中に挺進しようという考えがあった。先ず滑空機部隊とその搭乗部隊のことから説明しよう。陸軍の空中挺進部隊(略して空挺という)は、17年の中頃落下傘の聯隊は四個できていて、それ以上の増勢はなかった。落下傘の降投下では装備に制限があり、戦力の増加は望めなかったからである。これからの部隊整備は滑空部隊に重点が指向された。このことは我が国だけのことではない。欧米列強もそうだった。

滑空機の開発と操縦者の養成は、17年後半から始まった。最初に実用化したのは「ク」―1と称する小型滑空機で、97軽で曳航した。これは兵員は六人位しか乗れないので、謀略要員の潜入とか落下傘降下と併用して重火器の搬入などに使えるだけで、実用性に乏しかった。次に実用化したのは「ク」―

8で、これは武装兵20名位乗れて、山

砲・47ミリ対戦車砲・小型トラックなど搭載でき、97軽で曳航した。充分実用に堪えるもので量産された。

18年秋に「ク」―8と97重を装備する滑空飛行戦隊を編成し、西京飛行場に配置した。それと同時に搭乗部隊として挺進第5聯隊、挺進戦車隊、挺進工兵隊及び挺進通信隊が編成された。挺進第5聯隊は翌年滑空歩兵第1及び第2聯隊、並びに挺進機関砲隊に分かれた。

#### 挺進戦車隊

このとき滑空飛行戦隊の装備機「ク」―8には戦車は搭載できなかったが、近々戦車搭載の滑空機が出来ることを予測し、戦車隊が編成されたのである。その編成は、軽戦車と自動車各一個中隊及び材料隊というものだった。自動車中隊は四輪駆動小型トラック六四輛より成る輸送部隊で、「ク」―8へ搭載可能である。挺進師団ができたとき師団輜重となるべきものだったが、仮に戦車隊の中に編入されていた。

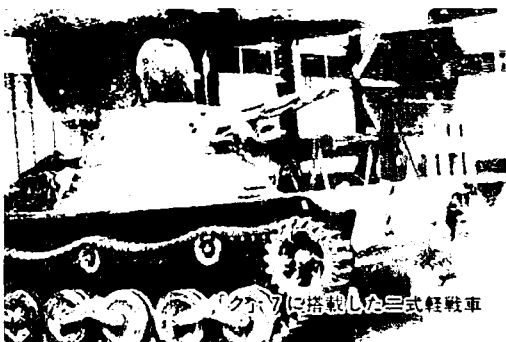
18年秋に出来た部隊は、従来からあった落下傘部隊(挺進聯隊及び挺進飛行戦隊)のうち内地に在る部隊と同様に、陸軍挺進練習部の隷下となった。翌19年には師団となる筈だったが、戦局の悪化に伴い実現せず、19年11月になっ

て師団より格が低い挺進集団に編合された。そのとき挺進戦車隊の中に歩兵中隊が設けられた。これは初代隊長の面高少佐の強い要望により実現したもので、同少佐は騎兵学校で小機甲部隊の戦術について研究しており、装甲の薄い軽戦車では、単車の段階から歩兵と一体になって戦闘しなければならぬという持論を抱いていた。挺進戦車隊の持っているのは2式の軽戦車で、運動性は抜群だったが、装甲は極めて弱体だった。

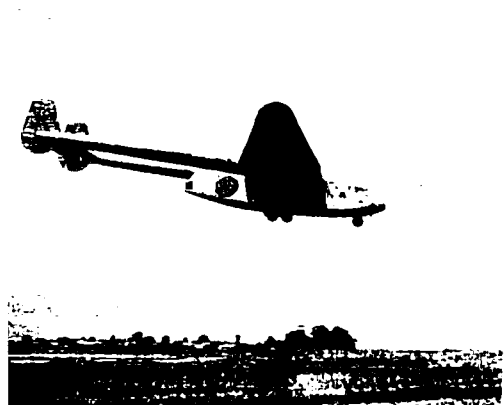
挺進集団の編成に伴い、面高少佐は集団司令部に転出し、私が二代目の隊長に補せられた。

さて、戦車隊待望の「ク」―7滑空機は、京都の桃山飛行場で4式重で曳航し試験飛行は終了していたが、その頃の戦局では不要不急のものと見なされ、資材の割当がなく、量産に入れなかった。

挺進集団の司令部及び滑空機搭乗部隊は19年12月ルソン島に渡ったが、挺進戦車隊は内地に残された。その頃挺進第3、第4聯隊より成る第2挺進団は、フィリピンに在って作戦中で、内地に在るのは第1挺進団だったので、挺進戦車隊は第1挺進団に配属となった。挺進飛行団として統一された飛行部隊のうち、滑空飛行戦隊はそのまま



「ク」―7の尾部と2式戦車



「ク」―7滑空機

内地に残り、挺進飛行隊はフィリピン方面の作戦で潰滅状態となり、内地に於て再建中だった。

翼を持たぬ挺進戦車隊は、編成地の宮崎県唐瀬原に於て、一般地上部隊の訓練を委施していたが、20年5月になって本土決戦の為、鹿児島県財部に司令部をおく第57軍の指揮を受けることになり、都城郊外の三股村に移駐した。57軍から受けた任務は、都城平地の対空挺部隊ということだった。

特攻隊差出しを命ぜらる

これまで滑空部隊全般のことを述べたが、これから標題のことに入る

確か7月末だったと記憶するが、三股村樺山に隊本部を構えていた私は、航空総軍から沖繩特攻の為、指揮官を含む二四人の自動車手を差出せという意味の電報を受けた。空挺部隊の指揮系統で言えば、私の属する指揮官は第1挺進団長であり、本土決戦については第57軍司令官である苦なのに、不審に思い、唐瀬原に在る第1挺進団司令部まで連絡特校を走らせた。自動車で4時間ばかりかかる処である。

連絡特校が帰って来て知ったことは、機関砲を搭載した96式小型トラックを「ク」-8に載せ沖繩の敵飛行場に着

陸させ、地上にある敵機を焼夷弾で撃つて廻るといふ計画だ。小型トラックは一二輛、操縦手は一車二名、砲手も二名で、砲手は挺進第2聯隊から差出す、指揮官は将月中尉と決定している。全般の指揮官は戦車隊から出せ、というものだった。なお決行は8月16日頃という。

これを聞いて私は吃驚した。夜間滑空機を曳いて飛行し、どの辺で切放すか知らないが、果して敵飛行場にうまく着陸できるだろうか。しかしこの件については当然滑空飛行隊長が同意したのであるから、いくらかの確率で目的地に着陸できるだろう。それから先のことは、どうして俺の意見を聞かぬのか。航空総軍の参謀が机上で考えたようにはいかぬ。この小型トラックは四輪駆動であっても、路外性は殆んど期待できない。飛行場の平坦なところに着陸できればよいが、隣接地の畑にでも着陸したときは、全く動きがとれぬ。そんなものを使うより、先般義烈空挺隊がやったように、徒歩兵を載せていって暴れまくった方が余程ましだ。その頃沖繩から飛来する小型機で南九州の鉄道は寸断され、地上軍の展開が阻害されること甚しいので、航空総軍ではこのような愚案を考えるの

だ。我が挺進戦車隊は去る4月に三笠

宮殿下の視察を受け、歩兵と組んだ戦車の単車戦闘を供覧し、精銳振りが中央にも聞えていたらしい。

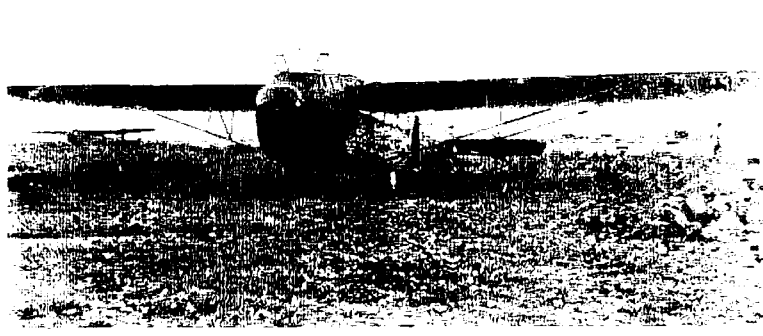
いろいろ考えたが、計画がここまで進んでは今更否とは言えぬ。私は自動車中隊長の広田敏夫大尉を呼んで概要を話した。勿論私が危惧の念を抱いていることなどは言わぬ。広田大尉は幹部候補生出身で現役志願した人、私が常日頃戦車中隊や歩兵中隊の訓練に熱心の為、敵が上陸して自分の中隊が置いていかれるとも思ったのか、爆薬を背負って敵戦車の下に飛込む訓練を盛んにやっていた。自分が真先にやると言っており、それは心底から思う思っているようだった。

広田大尉は私の話を聞かぬ、目を輝かして「私にその指揮官をやらせて下さい」と言った。そして間もなく24人の編成表を作ってきた。将校は大城中尉と鎌田少尉、ほかは下士官だった。下士官が多かったように記憶している。福生(現在の横田基地)まで出せという命令だったが、挺進第2聯隊の児湯郡川南村まで自動車を送り届けた。作戦に使う車輛は航空総軍で準備するという事だったので、拳銃だけ携行させた。

発進基地は新田原と聞いていたので、そのときは見送りに行くこうと、第1挺



前が開く



「ク」-8 滑空機

進団司令部と打合せておいたが終戦になつてしまった。広田大尉以下は福生で復員してしまつた。彼の生家は東京の本所、妻子は部隊が三股村に移る前に東京に帰し、山梨県に疎開したと承知していたが、復員帰郷先は分からな

い。25年頃だったか、総武線中山の駅前で彼が露店商をしているのにパツタリ出合つて、福生に行つてからの行動を聞くことができた。総軍で準備してあつた小型トラックは我が隊の持っているのと同じもので、その荷台上に急造の

砲台があり、航空機搭載の20ミリ機関砲が取りつけてあつた。「ク」一八から卸下する訓練をやつたが、思いもよらず終戦で、誰の指導だか忘れたが徹底的抗戦を呼びかけるビラをガリ版で刷つて、97重を飛ばして撒いたといふ

ことなど、話してくれた。この人はそれから10年位後に病没した。広田敏夫さんの奥さんとは今もお付合しているが、あゝのとき特攻作戦が行

われていたら私は一生精神的負担を免れなかつただろう。

一方広田隊を載せてゆく滑空機部隊はどうだったのか、滑空飛行戦隊長の古林忠一少佐は、戦後間もなく物故されたが、この戦隊にいた特操出身の人

達が作つた「音なき翼」という回想記があるので、その一部を引用する。

特攻編成

ついに3年に亙る訓練が、挺進作戦の可能性を立証する時が来た。7月中旬戦隊長と隊付佐官は東京に出張し、

三日後に宣徳に帰つて来た。直ちに各中隊長を通じてそれぞれ特攻志願者を募つた。方法は「熱烈望」「熱望」「希望」の三つに分け志願する様に通達があつた。7月25日志願者の中から長男を除き適任者八組が選出された。特操

出身少尉八名(神吉、岩佐、阿部、佐波、石津、大里、竹内、藤井)下士官八名計一六名、曳航機(九七重二型)も佐藤一中隊長、山口二中隊長以下正副操縦者、機上無線、機上機関、機上

射手それぞれが任命され特別訓練に入つた。しかしこの訓練は総仕上げのごく軽度のもので、主に地上自動車操縦訓練に重点がおかれた。

特攻に指名された者は一つの官舎に起居し互に激励し合い、身辺の整理をし、静かに出撃の日を待っていた。吾々は死を前にして、激情を胸の底に秘め、ことさら気負ひ立つ様子もなく、日毎に口数は少なくなつて行つた。

早朝高々度で沖繩上空に侵入した司偵は航空写真を撮影して来た。敵飛行

場の写真を毎日見ながら増え続けている敵機を如何にして攻撃、爆破するか、強行着陸が可能か、曳航機の遅い速度で如何に夜間とはいへ果して目的の

手前三〇キロまでたどりつけるだろうか、それらの話ばかりであつた。グライダーによる特攻作戦は「ク八」に九五式四輪駆動自動車に乗せ、この

自動車に十二・二ミリ機関砲二門、二〇ミリ機関砲一門をつける。落下傘部隊より降下下士官二名搭乗。操縦手は正副二名の編成で沖繩本島及伊江島飛行場に強行着陸し、自動車の機動性を

發揮して、地上待機の敵機を爆破炎上せしめ制空権を一時的でも確保する構想であつた。

滑空飛行第一戦隊の立川に近い福生飛行場(現在米軍横田基地)への進出命令は7月27日に下る。然し悪天候のため待機、8月5日漸く宣徳を立つことが出来た。

雲の切れ間には青空が澄んで見え、酷暑の8月なのに陽春を思わせるやわらかな陽ざしが、出陣する若者達の上に降り注いでいた。送る者、送られる者すべてが感無量で、手を振って送る者も、やがては後に続く者達である。

北朝鮮の赤肌の山々をあとに、爆音も高らかに壮途に上つたのである。われわれ特攻機を迎えた福生飛行場

は、緊迫した空気に充ちていた。特攻組の宿舎は多摩川の辺りに建つ三井の啓明寮と言う別荘で、夜は多摩川の河原に出て遊び、しばしの慰とした。

落下傘部隊の兵士を迎え、いよいよ総合訓練の夜間飛行に張り切り、航空総軍参謀は敵の制空圏にある沖繩に速力の遅い九七重が重装備の「ク八」を曳いて果して突入が可能であるか検討

していた。単独で突入すれば、敵戦闘機の好餌となつて、その上空到達さえおぼつかない訳であるが、これまで温存していた戦爆連合による沖繩攻撃を行い、一時でも制空権を確保、統いて

戦闘機の護衛をつけて突入すると言う構想を明らかにした。

しかし既に総てが遅かつた。幾度か戦機を掴もうと努めたが、遂に戦果を揚げることなく終戦の8月15日を迎えたのである。

最後に戦没・殉職された英霊に心から哀悼の意を捧げ、御冥福をお祈り申し上げます。

特攻慰霊協会会員倍增運動  
各人一名入会させれば会員は  
一二倍となる

小瀬利春

伊東修

鹿児島県、海軍機関学校34期。回天搭乗員、少尉。没後大尉。

有森文吉

佐賀県、水雷科下士官。回天搭乗員、上等兵曹。没後少尉。

ともに昭和20年1月12日パラオ・コッソル水道に突入戦死。



伊東修



有森文吉

力体力の限度まで悲壮な奮闘を続けたのである。

伊東修大尉は鹿児島市出身の海軍機関学校第34期生。重巡洋艦那智乗組を経て昭和一九年九月大津島に着任、回天の搭乗員となった。

健康そうな丸顔に明るい笑顔を絶やさなかった。父上は海上輸送任務で既に戦死されていたが、驕りがなくいつもニコニコしている顔だけが私の思い出に浮かぶ。沖繩で戦死した第一回天隊の隊長で一期上の河合不死男中尉も、日記帳を兼ねたような手製のアルバムに「実にいい男だった」と、彼の写真の傍らに最大の印象を書き込んでいた。大正十三年生まれの二十歳。

有森文吉少尉は佐賀県出身、鹿児島市能古見小学校高等科を卒業して海軍に入った。水雷科たき上げの下士官で筋骨逞しく、見るからに頼もしい偉丈夫であった。浅黒い顔に大きな目が印象的である。九三式酸素魚雷の機構に精通していたが、回天の整備ではなく搭乗員になることを強く要請して叶えられた。

このとき採用された水雷科下士官の搭乗員一〇名は、負傷して整備員に戻った一〇名を除いて全員が出撃し戦死した。

回天特別攻撃隊金剛隊の伊号第53潜水艦は回天四基を搭載して大津島基地を出撃し、パラオ島の北にある米機動部隊の前進基地コッソル水道の攻撃に向かった。昭和20年1月12日未明、最初に発進した久住宏中尉は直後に気筒爆破が発生して自沈、久家稔少尉は悪ガス発生のため失神し発進中止、伊東修少尉と有森文吉一等兵曹の二基が発進して水道東側の入口を目指した。

た側は通航可能な水路を選んで標識を立て、これを進んで艦船は暗礁の間を出入できるが、眼高が低い潜望鏡ひとつで水路を探って入る回天にとっては入口が何処にあるかさえ、見分けがつかないのである。戦後慰霊のため現地を訪問した人々は、攻撃地点に選んだこと自体が間違いであり、二基の回天は進入できた筈がないと判断するほかなかった。

回天の発進は午前三時五三分であった。母艦を離れてから実に四時間あまり経って後の交戦である。航行艦襲撃の場合ならば全速三〇ノットを出すのが普通は一時間内外の勝負であるが、泊地攻撃の場合は経済速力の十二ノットならば約三時間半水中を走れる。水上航走を長く使えば四時間後の戦闘はあり得ぬことではない。しかし、限度一杯である。潜入して水中突撃するだけの燃料はもはや無く、弾雨のなかを水上航走のまま最寄りの敵艦へ迫ろうとして遂に燃料が尽き、自爆したものとされる。困難な状況に屈せず、気

側は島がない。白砂の上に椰子の樹が密生する南洋群島のイメージとは全く違っていて、水面の真下一面に横たわる珊瑚礁の列にすぎないのである。占領し

ところが回天は泊地の中に入って戦闘していた。米艦の報告書が最近になって発見されたのである。同日午前八時、戦車揚陸艦の一群は海面上を進む人間魚雷を真近かに発見した。その進路上には大型の工作艦プロメテウスが碇泊していた。気付いた周囲の艦は艦砲と機銃で猛烈な射撃を集中、回天は命中

側は島がない。白砂の上に椰子の樹が密生する南洋群島のイメージとは全く違っていて、水面の真下一面に横たわる珊瑚礁の列にすぎないのである。占領し

ところが回天は泊地の中に入って戦闘していた。米艦の報告書が最近になって発見されたのである。同日午前八時、戦車揚陸艦の一群は海面上を進む人間魚雷を真近かに発見した。その進路上には大型の工作艦プロメテウスが碇泊していた。気付いた周囲の艦は艦砲と機銃で猛烈な射撃を集中、回天は命中

ところが回天は泊地の中に入って戦闘していた。米艦の報告書が最近になって発見されたのである。同日午前八時、戦車揚陸艦の一群は海面上を進む人間魚雷を真近かに発見した。その進路上には大型の工作艦プロメテウスが碇泊していた。気付いた周囲の艦は艦砲と機銃で猛烈な射撃を集中、回天は命中

このとき採用された水雷科下士官の搭乗員一〇名は、負傷して整備員に戻った一〇名を除いて全員が出撃し戦死した。

伊東少尉はいつも酒の相手が

いい男だった

(一兵だ)  
河合(一兵男)  
(一兵だ)  
久住元  
(一兵だ)  
橋口寛



回天最初の菊水隊出撃では搭乗員全員を士官だけで編成したが、第二陣の金剛隊で有森少尉は最初の下士官搭乗員として出撃に加わった。大正七年生まれの二六歳であった。  
コッソル水道で奮戦し、記録された回天は二人の内の誰が操縦していたか、判断する術はない、どちらであっても不思議はない、体力に優れ使命感に満ちた搭乗員たちであった。

金剛隊の伊53潜出撃に際し、三輪第6艦隊司令長官から訓示をうける久住宏中尉ほか隊員



伊53艦上にて左から2人目伊東少尉

河合(一兵男)  
久住元  
橋口寛

小林言三 確 (叔54)

伊東 修 (叔52)

回天 本当り  
川久保 軍人か



靖国神社遊就館にある回天

# 大西瀧次郎海軍中将 遺書の碑建立

飯野 伴七

平成12年8月19日「特攻隊の英霊に曰す！」で始まる、大西瀧次郎の遺書の石碑が予て建設中の鶴見總持寺内の中将墓地の一角に完成し、除幕法要が行われた。

大西中将ゆかりの海軍軍人門司親徳元副官を中心に百名近くが炎熱の墓地周辺に参列、板垣興宗貫主自ら導師となつて徒僧と共に読経、敵陣に進められ読経一段落の後、除幕の綱を引ききから

「遺書 特攻隊の英霊に曰す。善く戦いたり、深謝す。最後の勝利を信じつつ肉弾として散華せり。然れ共其の信念は遂に達成し得ざるに至れり。

吾死を以て旧部下の英霊と其の遺族に謝せんとす。

次に一般青壮年に告ぐ。

我が死にして、軽拳は利敵行為なるを思い、

聖旨に副い奉り、自重忍苦するの誠ともならば幸なり。

隠忍するとも日本人たるの矜持を失う勿れ。諸子は國の寶なり。平時に処し、猶克く特攻精神を堅持し、日本民

族の福祉と世界人類の和平の為、最善読経一段と高まる中を順次焼香拝礼申上げた。

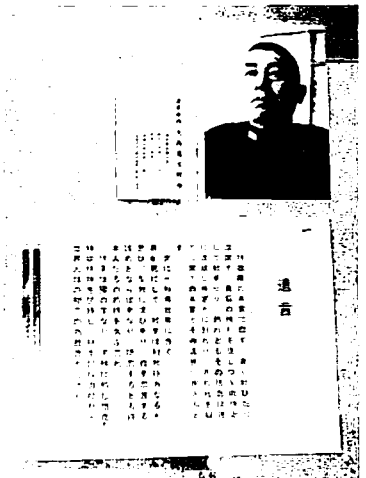
海軍中将 大西瀧次郎

声涙今に及ぶ遺書碑が鮮かに浮び出た。参列者一同炎天下の中将墓前に頷き

られ往時を偲んだ。

行事後一同は總持寺客殿

に招ぜられ、板垣貫主と挨拶し、清涼の茶一服を献せ



靖国神社遊就館展示

## 高千穂降下部隊を讃える歌

——この中の一部で初めから収容の見込みのない目標に向う部隊は、特攻隊ということで出撃して行った。海上に撃墜され浮遊していて敵に捕えられた者が四名許りいるが、それ以外一名の生還者もない——

## レイテに咲く花

## 一 神の歩みし日向路に

秋の祭の夜は更けて

飛電は告ぐる「捷一号」

今宵名残の笛の音は

庭のさんしょに鈴かけし

想の人よ、わが胸は

もののふの道踏み征かん

疾きこと風の如く去ぬ

## 二 「今日咲きて明日散る花」と若人の

「悲しき命積み重ね」

神風呼ぶか特攻に

ルソンの基地は火と燃ゆる

「雲染めて屍悔なく散る」という

サンフェルナンドの壁の文字

目指す主力はブラウエン

サンパブロ ドラッグ タクロバン

一、昭和19年10月20日敵はレイテ島に上陸、その二日前に比島方面決戦の捷一号が発令されていた。当時陸軍の落下傘部隊である挺進第一乃至第四聯隊は宮崎県唐瀬原基地に、挺進飛行第一、第二戦隊は新田原基地にあり、共に陸軍挺進練習部長の隷下にあった。

10月24日、第二挺進団の第一陣として挺進第三聯隊に動員が下令され、数日遅れて第四聯隊と第一挺進団司令部及び挺進飛行第一戦隊に動員が下令された。更に若干遅れて挺進飛行第二戦隊の一個中隊がこれに加はった。聯隊や戦隊は常に戦時編制を採っており、挺進団司令部は挺進練習部で編成するのであるが、動員計画に決められているので、どの部隊もすぐに編成完了した。部隊長と通称名は次の通りである。

## 第二挺進団 高千穂

大佐 徳永賢治

## 挺進第三聯隊 香取

少佐 白井恒春

## 挺進第四聯隊 鹿島

少佐 齊田治作

## 挺進飛行第一戦隊 霧島

中佐 新原季人

## 挺進飛行第二戦隊第一中隊阿蘇

大尉 三浦 浩

先陣の挺進第三聯隊は翌25日には日豊線川南

駅を発って佐世保に向った。

何日征くか何日散るのかは知らねども

今日のつとめに我は励まん(詠人不知)

覚悟はできていたが慌しい別れだった。

さらばとて握れる夫のたくましき

み手のぬくもり今も残れり(ある妻の歌)

聯隊は佐世保で空母「隼鷹」に搭乗し決戦場

に向った。

二、隼鷹は敵の空襲を避けボルネオのブルネーに寄港し、11月11日マニラに入港した。荷役作業実施中の13日マニラは大空襲を受け、戦況の容易でないことを知る。ここで空路到着した徳永挺進団長の掌握下に入り、クラーク基地のアンフェレスに到着すが、航空特攻は先月25日の神風敷島隊を嚆矢として既に開始されていた。

今日咲きて明日散る花の我が身かな

いかでその名を清く留めん(詠人不知)

この歌は海軍神風特攻隊員の遺詠という。

ますらおの悲しき命つみ重ね

つみ重ね守る大和島根を

この歌は三井甲之という歌人が、昭和二年に駆逐艦藤が演習中に沈没し殉職した知人を悼んで詠んだものであるが、この頃の我々の心境にふさわしいので愛唱歌になっていた。

レイテ空挺作戦はブラウエン地区の三つの飛行場を奪取し、脊稜山脈を越えて進出する第二十六師団の部隊と提携してタクロバン平野に対する攻勢の初動を掴もうとするものだったが、レイテ湾沿いのタクロバン、ドラッグ両飛行も同時に制圧しようと、特攻隊ということでもここにも一部を差向けることになった。第一次降下部隊白井聯隊長以下約五〇〇名が、12月6日午後三六機の輸送機と四機の強行着陸重爆でアンフェレスを発ったが、宿舎の壁に次の歌が書き残されていた。

花負いて空うち行かん雲染めん

——屍悔なく 我等散るなり(詠人不知)



## 三、

鵬翼千里南冥の  
空を圧して進めども  
逆巻く砲火如何にせん  
辛くも降りし百余名

## 四

ブラウエンに屯せし  
敵雑軍は蹴ちらせど  
後援続かず補給なく  
剣は折れて矢弾尽く  
抜山蓋世の勇あるも  
時に利あらず馳遊かず  
捨つる命は軽けれど  
青史に一言残さんと  
五十余日の山越えに  
聯隊長の一行は  
カンキポットに辿りつき  
魂魄ここに留りぬ

## 五

一番乗りは譲りしも  
ブラウエンに続かんと  
思は走せる決戦場  
命、卒然と下りしは  
オルモックの急救うべし  
大廈崩るに似たれども  
五百の精兵欣然と  
バレンシヤに舞い降りぬ

## 三、

目標上空に到達したのは計画通り薄暮だった。レイテ湾沿いのタクロバンとドラッグに向った部隊は、地上及び艦船からの物凄い対空砲火を受け殆ど撃墜されてしまった。海上に墜落し浮遊していた翌朝敵に捕らえられた者が四人いる。これらの人の証言や米軍資料をみても両飛行場制圧は不成功に終わった。

ブラウエン地区三つの飛行場に向った部隊のうち、ブラウエン北飛行場に降下した白井聯隊長以下の行動だけは明確に伝えられている。これは聯隊長の手記が、後にセブ島に脱出した四聯隊の将校の手で戦後持ち帰られたからである。それに拠ると降下した晩北飛行場の敵は滑走し、後半夜到着する筈の第二次降下部隊の為夜通し航空燃料等を燃し続けた。一方ルソン島のリパでは第二次降下部隊が待機していたが、帰って来た輸送機は八機に過ぎなかった。それでも重火器中隊を載せて発進したが、脊稜山脈上空は雲深く遂にブラウエン上空まで行くことができなかった。

## 四、

ブラウエン北飛行場に降下した白井聯隊長は六〇名許り掌握したが、その晩北飛行場に突入した筈の第十六師団の部隊とは提携できなかった。この部隊は敵上陸以前からレイテを守備していた師団で、この頃一部が山の中に残っていた。翌7日戦車を伴う敵の反撃を受けそれ以上掌握できないので、山越えで進出して来ると聞いていた第二十八師団と提携しようと八日になって南飛行場の方に移動した。南飛行場にも一個中隊降下した筈だが消息全く不明で、10日になっ

## て第二十六師団の小部隊と出合った。

18日になって第二十六師団の重松大隊と合流し、敵一個師団が西海岸のイビルに上陸した為ブラウエン進攻作戦は取り止めになったことを知った。その後いつどこで承知したか不明であるが、第三十五軍はカンキポットに終結することになっていると知らされ、五十日余りかかってカンキポットの軍司令部に辿りつき、白井聯隊長はここで陣没した。

## 五、

挺進第四聯隊は一部を第一次降下部隊として参加させていたが、主力は翌7日にブラウエン北飛行場に後続部隊として降下することになっていた。ところが西海岸のオルモック南側のイビルに新手の敵が上陸し、ブラウエンに向う作戦が取りやめとなり、オルモック救援作戦を行うことになった。レイテには従来からいた第十六師団のほか、敵侵攻後に投入された第一師団、第二十六師団等がいたが、全部東方から迫って来る敵に対して展開しており、島内の指揮中枢であるオルモックには予備隊は皆無だった。鈴木軍司令官はブラウエン作戦を指導する為東方のルビに在り、オルモックの軍司令官には参謀長が留守を守っていた。

挺進第四聯隊は8日から14日まで六回に分れて四八一名がオルモック北方一二キロのバレンシヤに降下し、友近参謀長の指示を受けオルモックの攻防戦に参加した。六回にも分れたのは使える輸送機が少なかった為である。



六 勝に驕れる敵兵を

渦巻き返す反撃に  
軍司令官の一群は

危く虎口を脱したり

二万の敵の猛攻に

激闘二旬食もなく

最後を飾る新込みは

敵心胆を奪いたり

七 レイテの空に咲きし花

毗高まじりきつわものの

色よ香よ今いづこ

人の心はうつろふと

「あらわさん大刀のほまれ」と詠うたいつつ

勇躍征きし若人の

遺烈は永久に伝うべし

その名高千穂降下部隊

六、8日先陣の一個中隊がバレンシャに降下しオ

ルモックに駆けつけたが、市街地は既に敵に占

領されていた。10日には斉田聯隊長以下一個中

隊がバレンシャに降下し、友近参謀長の指示を

受け、8日に降下した先遣中隊も掌握してオル

モック北側でバレンシャ方向に通ずる道路の東

側に陣地占領した。これより先友近参謀長はド

ロレスに集結していた今堀支隊(26D)独歩12今

堀聯隊長の指揮する二個大隊)を本道沿いに陣

地占領させていたので、斉田聯隊を今堀支隊に

配属し、それに連繫して陣地占領させたのであ

る。

七、斉田聯隊は数回に亘り後統部隊がバレンシャ

に降下し戦場に到着するので、士気極めて高く、

熾烈な砲撃を浴びても陣地を確保し、夜は敵後

方に盛んに斬込みを行って敵を悩ました。この活

動があった為に一時行方不明になっていた軍司

令官以下が、後方のファトンに到着できた。16

日本道沿いの今堀支隊の陣地は突破され敵は奔

流のように北上した。

七、斉田聯隊は断乎陣地を固守していたが敵は次々

と北上し、オルモック近傍にいても意味がない

ので、ナグアン山の麓で自活し、翌年2月5日

カンキポットの軍司令官のものに到着した。そ

の時の人数は約百名だった。一方ブラウエンか

ら転進した白井聯隊長以下数名はこれより前1

渡った。その中の二十名が戦後帰還した。12月

6日にブラウエン等に降下した者には一名の生

還者もないが、斉田聯隊の生還者によってある

程度の実相を知ることができた。

あらわさんときは来にけり千早ぶる

神に仕えし太刀のほまれを

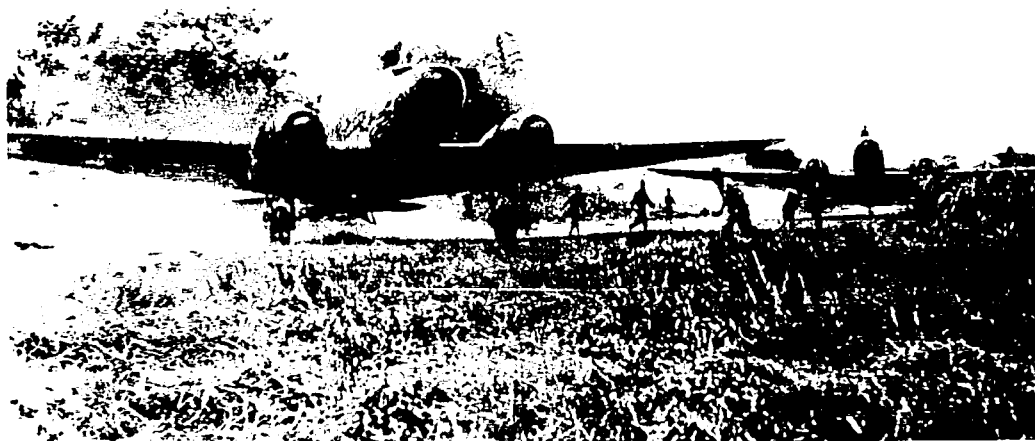
ブラウエン南飛行場攻撃隊長だった第三聯隊第

二中隊長桂善彦大尉の遺詠である。この中隊の

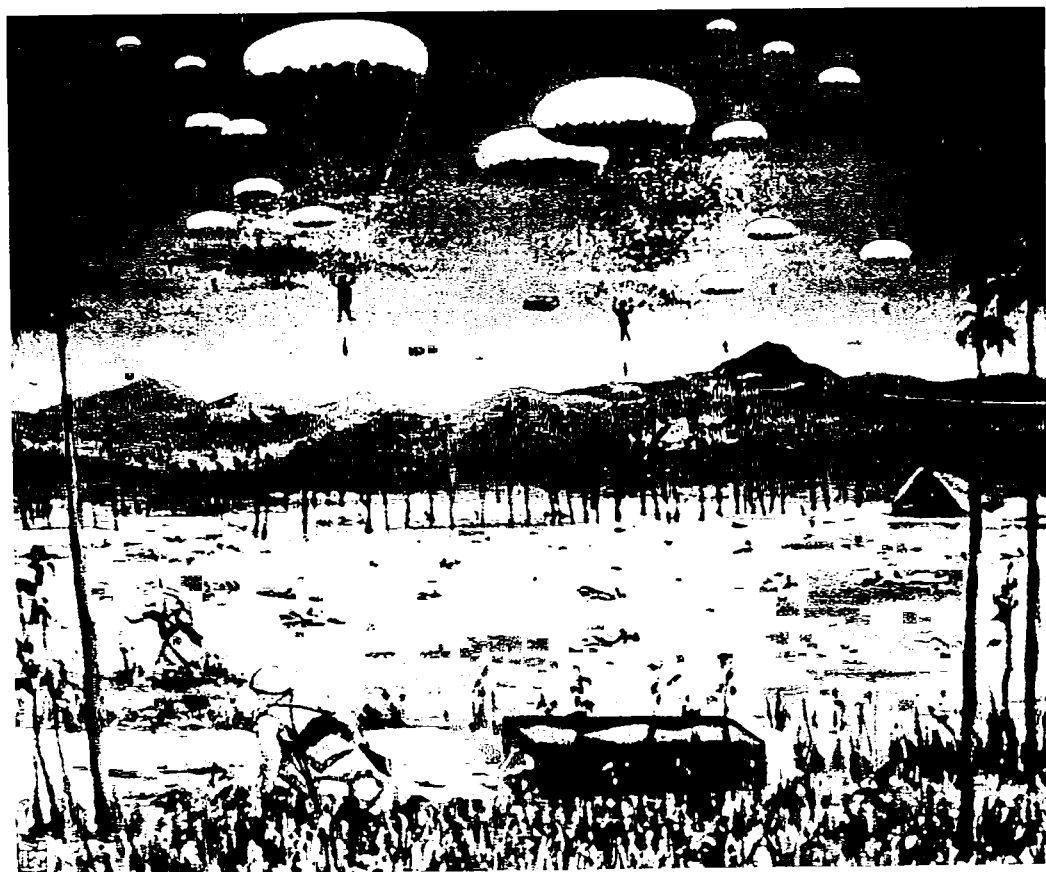
降下後の行動については全く分らない。



タクロバン攻撃隊は重爆に乗り強行着陸する  
特攻隊ということで出撃していった。



12月6日午後第1次降下部隊はルソン島アンフェレス離陸



主力は夕刻レイテ島ブラウエンに降下  
松本武仁画伯の油絵より

特攻隊員の

人を恋うる歌①

「妻をめぐらば才たけて」で歌い出す  
与謝野鉄幹の佳詩「人を恋うる歌」が  
ある。それと一脈通ずるものを特攻隊  
員の歌から拾ってみる。それは既に会  
報に載せたものであるが、角度を変え  
て見ると感銘深いものがある。

石腸隊

井樋太郎少尉の詩

19年12月12日 比島バイバイ  
冲敵艦船に突入戦死

怒涛逆巻く玄海に

彼の白鶴の舞ふ如き

銀砂の浜と虹の松

幼き頃の思出は

素足で野山を駆け廻る

あゝ大いなる氣をすひて

我は育てり十余年

緑に煙る筑紫野の

多市施の流れ清くして

空ゆく雲の影うつす

水をながめて啄木と

語り過せし日もありき

ああ故郷は紅葉して

秋の陽みてるたんばみち

朝な夕なの通学は

銀杏の並木白き道  
栄の城のほりばたの

吹く秋風にさそはれて

しだれ柳の葉が落ちる

あああの道をあの樹々を

遙か比島に偲びなん

故郷は袖のまち先哲の

道をたづねて此の我に

死ねと教えし葉隠の

うつぶつの氣を宿す所

ああ偉なるかな大自然

ああ偉なるかなその言葉

深きめぐみにいだかれん

いばらの道と人は言ふ

詭計の花の赤く咲き

母と歩きし田舎道

歩行し難き世の中を

一步一步に感じつつ

あああの土手にて食ひたる

冷たきむすびに降る涙

父の病の篤きとき

姉と詣でし不動尊

幼き四人の集りて

母に贈りしゴム手袋

ああ我がなきあとも同胞は

一つ心にむすばれて

変るなかれと祈るかな

この詩はあと十三節続き特攻出撃の

ことにまで及ぶが、ここでは人を恋

うることの滲み出た幼い頃の部分を

掲ぐ

回天特攻隊（人間魚雷）

石川誠三中尉の短歌

思はじと思えどかく思い出づ

故郷の母よ健やかにおわしませ

母上よ消しゴム買うよ二銭給へと

貧をしのぎしあの日懐かし

明日の日は戦い死なむ今日の日は

静かに故郷の春を偲ばん

第23教育飛行隊

木下栄寿中尉作詩

鈍田教導飛行隊付として原

ノ町で教官をしていた頃、特

攻隊を送り出し作った歌。本

人はその後満州に転出、戦病

死。

原町特攻隊の歌

一、さらば元気でいておくれ

永の別れが 明日となる

恋の原町 あとにして

夢は爆音 ああ消えてゆく

二、二度と逢えない二人なら

胸の写真が マスコット

晴れの 特別攻撃隊

君と一緒に ああ体当たり

三、見事 敵艦 沈めたら

笑って死んだとほめてくれ

晴れの感状 届いたら

会いに来てくれああ九段坂

四、俺が 戦死と聞いたなら

泣いてくれるな これお前  
白木の箱が 届いたら  
抱いておくれよああ思出し

右の歌は特攻隊要員が恋人に對する  
思いを詠ったものであるが、その反對  
の立場のものを協会が刊行した本「小  
栗かえで著／愛は終り無く」より抜粋  
してみよう。著者は第106振武隊林義則  
少尉と將來を約した女性。同少尉は20  
年4月22日、知覧から出撃散華した。

この本のまえがきの一節「この短い  
期間に一人の女の一生を支配する程の  
心を持っていたあの人は、死を前にし  
て最愛の者に遺したものは、それは何の  
形とてはないけれど珠玉のような愛が  
遺された。命がけで愛された自分の残  
りの生涯をその愛と切なかつた思出を  
支えとして五十年を生きてきた」云々

（戦死の公報を受けたとき）  
我れを遺きて遂にゆきしか  
我を遺きて

武士道とふものはかくも悲しき  
（村葬を前にし）  
待ち侘びし御魂還る日近ければ

心粧いぬ悲しみに堪えて  
一年を経て還り給いしきみの御魂  
全身をもて 抱き参らす

以上記述した詩歌は昭和史を彩る我  
が民族の叫である。後世に伝えねばな  
らぬ。